

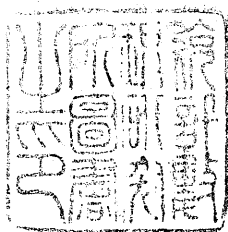
T 02
N 69
52

日本における統計学の発展

第 52 卷

武 通 我 久 手 話

尚 田 豊 手 聞



1982年1月25日，2月4日

農林統計協会にて

ま え が き

- 1) この速記録は、昭和55、56、57年度文部省科学研究費総合(A)によるもので、研究者は次の通りである。

江見康一、丘本正、大屋祐雪、坂元慶行*、鈴木雪夫、竹内清、西平重喜*(代表者)、野沢正徳、広田純*、藤本熙、松下嘉米男、松田芳郎*、三瀨信邦*、森博美*、山元周行(* 推進係)

- 2) インタビューの聞き手としては、研究者以外の方々のご援助を得た。その方々のお名前は、別巻を参照のこと。
- 3) この速記録の原本は、統計数理研究所図書室に登録保管される。そのほか、話し手と聞き手及び関係の協同研究者が保存する。
- 4) この速記録の利用に制限はつけないが、話し手、聞き手、研究代表者または推進係と話し合った後にされるよう希望する。
- 5) 速記録を個人的に研究するため、コピーを希望する方は、代表者がコピーしやすい形で保管しているので、それを利用することができる。

以 上

豊田 きょうは久我さんにインタビューということで、いろいろ思い出をお伺いしたいと思います。

久我さんについては、何といても農林統計の久我さんというイメージが一般的だと思います。このインタビューでどういうことをお聞きしたらいいのか、わかりませんが、やはり農林統計に携わってこられた。そのことについてお伺いするのが妥当だろうと思います。

ふり返ってみまして、久我さん、農林統計に携わられたのは大体何年ぐらいですか。

久我 農林省の役人とお年やった。官房の文書課に調査室というのがありまして、入ってからじきにそこで調査の仕事と始めたんです。統計課とは別でしたけれども。

豊田 昭和11年に入省されて、東北農政局長になられたのが-----。

久我 東北農政局長を3年やりました。40年に東北農政局長で行ったんだから、11年からそれまでの間やったことになる。

豊田 30年ぐらいですか。久我さんの生涯のほとんど中心的部分。

久我 そうですね。

豊田 日本の統計界でも、やはり久我さんは戦後の農林統計の中心人物ということになってると思うんです。私自身、考えてみましても、役人生活は、ほとんど久我さんの部下だったような感じがするんです。

久我 一緒にやりましたね。

豊田 私、22年からですから、海外へ出たときを除いて

ほとんど久我さんが上司でした。おかげで、あまり役人らしい感情を持たずに済んで、幸せだったと思っています。そういう意味で、戦中から戦後への農林統計の中心になられて、久我さんご自身の生涯においても、中心の時代であつたと思うのです。そこで、主としてその点についてお話を伺いたいわけですが、その前に、農林統計にかかわりを持たれるようになった伏線として、社会科学に関心を持たれたことについて。

久我 社会科学研究会というのをこえた。

豊田 それで東大の農業経済学科と専攻された。その辺のところから、伺いたいと思うんです。

久我 関心を持っておりましたけれども、理科でしよう自然科学ですか。

豊田 高校は、学習院の理科ですか。

久我 理科かうでなきゃ、農業経済に入れなからだから。

豊田 農学部だから、そうですね。

久我 農業経済なんて考えてもいなかったんですよ。ほくは、貝がうだとかクヨククヨだとか、そういうものを子供のころうんと集めたりしまして、そういうことから、そんなものとは本当はだいぶ違うんだらうけれどもとかく動物学者にならう、そういうことを考えていた。東大の理学部の動物学科を、1回受験したんです。それで落つた。きわめてのんきな話で、入れてくれないのか、そうかというように調子だったんです。

ところが、その年、昭和7年、東北が相当の冷害だったでしょう。いまは故人ですが、私の同級生の垣見貴一郎という、最後に長期信用銀行の頭取になつた男が、九州大学の法学部に入っていた。学習院の同じ弓の選手の

仲間だった。ぼくは、大学の受験に落ちたものだから、次の年までひまなわけだ。ろくすっぽ勉強もしていなかった。その秋、二人で北海道へ旅行したんです。

その帰り道に、疲れたからというので道中でおりました。繋の温泉に寄っていろいろというので、あのころですからぼつぼつ歩き出し繋まで行ったんです。その途中で、ある農家が、子供を木のすごくぶん殴ったりしているんだ。しかも、わまで、その親らしいのが一生懸命謝っているんだ。あつげにとらわれて、どうしたんだと聞いたら、大根をとったという、東北の冷害で、あの辺は非常に飢饉だったんです。だから、米がないんで、ようやくオレの家で大根をつくって、オレが食おうというのに隣の子供といえどもとられてたまるかということらしい。言葉は、あの辺の言葉だからよくわかるないんだが、木のすごくぶん殴っている。

そこで「まあ、待て」——というのは、ぼくらは二人で北海道を旅行していたから、リックサックの中にまだ米や何か残っているわけですよ。そこで、飯じょうを出して木っ端や何か集めて炊いて、子供と親に食べさせた。両方の親に、とにかくけんかするな、米の飯を炊くからかん詰めたの何だの食ってくれ。ぼくらは泊って、帰るだけです。というてやったわけですよ。そのときに、「うめエを」といつて、子供がボロボロ涙を流しながら米の飯を食べていた。

それで繋温泉に泊って、明くる日帰ってまたけれどもどうも気になってしまいがいいんだ。その前に社会科学の勉強はしておった。しかし、何を一番先に読んだかという、エンゲルスの「自然弁証法」だった。そういう

ところから最初は入っていった。けれども、とにかく東北の冷害の農家で、米をつくっている連中が、何で米が食えないんだろう。まだ学習院の学生だったのだから、そういうことは想像もつかないんだ。

それで帰りがけに、垣見と別れて、神田の古本屋を何か教わるものはないかと歩いていて、ひまっと思つたのが那須熊先生の「農村問題と社会理想」という本なんだ。これは文学の本みたいだから、読みいい。それを買って、読んで、先生は若いころ（大正12年）これを書かれたんだから、地主の横暴を存じたりなにかすることに書いてある……。

豊田 小作争議が起こってきた時代ですね。

久我 その本に非常にひかれまして、この先生、どこにいらっしゃるう、東大の農学部、農業経済だ。それじゃ、そこへ入って、オレは何にもできないけれども、とにかく農家があんなに苦しんでいるんだから、一つでもいいから何かやることがあるんじゃないかと思って、オヤジに、「オレは理学部へいくのをやめる。こういうわけで農業経済学科を受けて入ろうと思う」といったら、「それはその方がいいよ」とオヤジは大変喜んだ。

ぼくらの時代の学生は、近ごろの学生とはまるで違っていた。いまは幼稚園の頃から、定年退職後の退職金を勘受したりするなんて話に聞くけれども、そんな考えは少しもなかったわけでしょう。とにかく勉強して、農家のために何かプラスになることができることはないだろうかということだけで、自分で農業経済へ行こうと決心して受験して、入ったわけですよ。

大学は、入ってみれば、必ずしもぼくの理想としたま

うなところではなかった。これはしょうがないな。

豊田 それはそうですね。端的に農村問題や社会問題に通ずるものじゃなかったでしょう。

久我 けれども、井上晴丸さんには追悼録にちよつと書いたように、ぼくは大変お世話になった。

豊田 井上さんが又年上ですか。加用さん、井上さんが同期くらいですね。

久我 井上さんの「薰風去りて帰らず」という追悼録があるんです。あれにぼくは書きましたけれども、大学の入学試験が終わった翌翌日に、ぼくは合格の通知を見ずに警察へ引っぱ張られたわけだ。

学習院のぼくらの先輩で、本当に共産党の運動としていた男に、この人間をかくまってくれと頼まれたんです。それは昭和6年ごろ。そのころ家が原宿の相当でかい。庭が広い家だったものですから、「よしまた」というわけで、ぼくの部屋にその人が1ヶ月ぐらいいいた。その人がぼくに、マルクス主義の話を非常にていねいにいろいろ話してくれました。いまだにその人の名前が本当はわかっていないんです。名前を聞きちやいけやいといわれていたから、聞かなかった。

戦後になって、井上晴丸さんから、この人か。この人かって写真を見せられて、「あ、この人だ」といったのは、岩田義通。

豊田 彼は獄死？

久我 獄死じゃない。築地署につかまっていて、警察に殺されちゃった。その人が岩田さんに遠いような気がするけれども、本当はわからないですが、もしそうであるなら、私の家を出て3日目に死んでいゝんだ。その

かくまったことがバレたんですな。

豊田 どこへつかまったんです？

久我 幡ヶ谷の警察で、特高につかまった。それで除夜の鐘と同じ、108日間警察でもうそう飲と食った。だから、東京にやうの警察をあっちこっちたらい回し、本当にひどいデロを受けました。かくまった人物の名前をいえというんだ。聞いちやいけないうから、聞かなかったんだ。だから警察が間違えて、こいつは大物だと思つたらしい。さんざんいろいろなデロを食って、17回気絶した。

だけど、知らないということ強いことだな。本当に知らないんだから。隠しているんだと思って、警察はデロをやるわけだ。やっぱり検事の方が警察よりは上ですよ。これは本当に知らないんだなと検事がわかって、起訴猶予になつて出てきた。

豊田 108日も入っていたら、もう夏休みじゃないですか。

久我 夏休みも過ぎちゃって、秋。それで初めて大学に行つて、「農業経済学科というのはどこですか」と聞いたら、「見たことがないやつがいる。だれた。入ったのにとらうして来たかったんだ」というから、「警察にいたから来たれなかった」と答えたんですが、それが井上さんだったんで、「それじゃ、ちよつと来い」というので、園芸教室の持つているテラスガーデンというのがありましたが――。

豊田 そのときは、まだ駒場ですね。本郷へ移ったのはちよつと後ですね。

久我 本郷に移ったのは、ぼくが3年のときです。

豊田 昭和10年ごろですね。

久我 それでテラスガーデンのところへ行きました。井上さんからいろいろ話を聞きその後もういろいろ世話になったわけですね。井上さんから「大学というのはスパイがいたりするから、気をつけろよ」なんていわれたことを非常によく覚えている。

豊田 井上さんは、もうマルキストだったでしょうね。

久我 彼は、その前に又回ごういつかまっていた。

ぼくが警察で同じ部屋になったのが、くしくも農業経済学科にいた内ヶ崎慶次郎さん。留置場で一緒だったことがある。彼はすでにリッパな大学の助手ですよ。ぼくは学生で「おまえ、どこへ入ったんだ」「農業経済へ入った」「オレのところへ来たのか」というわけで、一緒におるんだから気が強かったね。

那須さんの教室にはいるつもりで、先生を一番先に訪ねようと思って、「農業経済学科の部屋はどこですか」といったら、聞いた人が井上さんだった。井上さんの追悼録にその当時のいきさつを書いたけれども、そういう意味で、井上さんにそれからずいぶんお世話になった。

そういうことで農業経済学科へ入ったんで、統計をやるとなるという気持ちは全然なかった。

豊田 農業経済学科で近藤先生との出会いは、やはり久我さんの生涯、ある意味で非常に深いご関係だったと思います。

久我 それは、こわば逆説の関係だったな。先生はマルクス経済学者だから。あのころは、戦争がだんだん近づいてくるころだから、近藤先生は非常に苦しい立場におられたんです。野間海造とかいろいろのがいて、先生

を圧迫していた。もう一つは、あの時代は那須先生全盛時代だった。近藤先生は佐藤寛次さんの弟子ですから、農業経済学の方の後を継がれた。那須先生の派ではないということもあつた。ぼくは、近藤先生の学問を非常に尊敬して、先生がタバコの調査や何かやられるときに、いつでも参加して、一緒に先生の教えを受けていた。それから先生が「産業組合論」を出されるときに、先生の手書かれた原稿を、ぼくの方が字が下手なのに、淨書したりそんなことで、学生ですからどつらの先生の系統ということもなく、近藤先生には非常にお世話になった。

ただ、ぼくは農政の方を勉強したでしょう。だから、卒論は東畑先生に出した。卒論の指導を受けるのは、農業経済をうろうろに行けということでした。近藤先生は助教授でいられて、大学の本科の方の先生をしていられてなかった。そのころは、教員養成所の方の先生だった。だから、先生に論文を出すことはできない。出すなら佐藤寛次先生。これを出しても意味がない。指導を大して受けられないから。

豊田 何を書かれたんですか。

久我 特殊部落の土地問題を書いたんです。

豊田 その当時、そういう問題を扱えましたか。

久我 先生もみんなびっくりした。

豊田 非常に扱いにくい問題だと思いますけれども。

久我 これをいい出すと、また話が非常に長くなるけれども、それは因縁があるんですよ。その話は何かの機会にしましょう。話があまりそれやうかう。

豊田 近藤先生との出会いで、調査などに一緒に行かれた。そのときは意識されなかったでしょうし、またその

後のいろいろな事情による結果でしようけれども、近藤先生
 にご自身も統計へ近づいていかれたし、久我さんもやはり
 統計の方へ-----、
 又我 それは有馬頼寧さんが、統計を確立せにやダメだ
 ということ、近藤先生を農林省に呼ばれたからですよ。
 そのときは、ぼくは農務局（いまの農政局）におりました。
 豊田 農林省にお入りになったのは、昭和11年ですね。
 農林省に入られてから統計に移られるまでの経過を、ち
 よっと伺いたんです。
 又我 当時はみんな、あまえどこへ行け、農林省の試験
 を受けて、農会の試験を受けろ、そういうことを大学の
 主任教授が決めたものなんです。それで当時の主任教授
 が那須先生で、ぼくに満州国へ行けというんだ。満拓か
 何か。ぼくは「東北の農家が食えないから、農業問題を
 勉強しよう」と思っていたわけですか、「そんな日本帝国
 主義の属国、軍閥の属国へ行つて働く気そんなかい」と
 ことわってしまった。那須先生は怒って、「もうどこにも
 世話してやうぬ、勝手にしろ」といわれた。それで大学
 新聞に、「けしからぬ、学校が就職を規制するとは何事だ
 というようなことを書いたことがあるんです。
 しかし論文を見ていただいている東畑先生から「そんな
 こといわずに、とにかくオレの手紙を持って農林省に行
 ってみろ」といわれたんです。だから、大学の推薦で
 なしに、ぼくは、東畑先生の手紙を持って農林省へ行っ
 たわけですが、受け付けてくれたのが、当時の農務局と
 畜産局とだけだったんです。
 豊田 局ごと採用していたんですか。

久我 農学士は、みんな局下試験をやったんです。それで試験を受けて、湯河さんが農政課長だったが、農務局へ入れてやろということになったんだけど、出てこいといわなかった。ちよつと待てという。そのうちにもう一通試験をするというんだ。

豊田 なぜかという。大臣官房文書課調査室をつくるので農務局へ入った人間の中から、だれかを採るということだったらしい。それまでちよつと出てくるぞというわけだ。みんな出てくると、係へ置かれちゃって、後で抜くとまた怒るから、出てくるぞとやったんでしょう。

豊田 新設のところへ持っていきこうとしたわけですね。

久我 それで試験を受けに行ったときに、蓮池さんだとか、この間亡くなった山添利作さん、いま生きてあられるんでは柳見さんが試験官で、質問を受けたんです。文書課長の細川さん（後に商産局長をやられた）に、「医療組合というものをどう思うね」といわれたから、「あれは産業組合運動の邪道だ」と答えてしまったんです。

そうしたら、蓮池さんというのは、そのとき官房に来ていたけれども、産業組合運動として医療組合をこさえていく中心の事務官の有名な人であっただろうしい。

豊田 医療組合というのは――。

久我 産業組合運動でお医者さんを――。

豊田 医療施設をつくるとか。

久我 だから、それは農業の生産活動でもないし、邪道だとやった。そうしたら、「何が邪道だ」と怒って、2時間議論しちゃった。これはどうせダメだ、落とすためにあのようなことをいやるんだなと思った。当人はカンカンに怒って議論しているんだが、ほかの山添さんの

何だの、みんな知らん顔をしている。後で入ったかう、
「医療組合のエルサレムに邪道だなんていうやつがある
か」って榊見さんなんかにいわれたけれども、こちらは
何も知らないんですから、之瞬間議論したら、こいつお
もしろいから採ってやろうということになって、調査室
へ行った。

だから、いろんな調査のことで官房の統計課とはかか
わりがあつて、統計官は長畑さんというのがおられて、
よく会ったりした。それで近藤先生が統計課長で、統計
改正をやられたでしょう。だから、官房としても手伝え
ということ、仕事の上で近藤改正にタッチしたという
ことです。

豊田 統計の才に、もうそのとき関係は持たれたわけ
ですね。

久我 ちよつと持ったわけですね、それはちよつと関係を
持っただけで、大臣官房の調査室ですから、そこではよ
り以上に政策のための調査が仕事でした。

豊田 そこでは、どんな仕事をされたんですか。

久我 それは、いろんな調査をやりました、大臣の諮問
の調査ということで、

豊田 いまの官房調査課みたいな。いわばその前身です
ね。

久我 そうです。田中覚と、ぼくと、それから、土方と
いうのがいた。彼はいま住友金属の社長が何かやってい
ると思いますが、役人をやってみて、こんなつまらない
ものはないといってやめて、住友へ入った男です。もう
一人、沢田修二郎という後の九州大学の経営学の先生、
この4人がいて、官房調査をやっていた。

豊田 大体農業経済関係の人達ですね。田中覚さんも、
 たしか農業経済の先輩ですね。
 久我 井上晴丸と一緒に、ほくより2年前です。
 それで、ほくは何を主としてやったかという、生産
 統制令なるものを戦争にやっつけくり出した。要するに
 総動員法の関係の資源調査に関する仕事、官房調査室
 の1つの規定上の根拠ですから、その仕事として、ほく
 は労務調整の仕事をやったんです。
 豊田 そこで労務調整が久我さんの仕事になり、そのこ
 とが、その後の久我さんに影響していたと思うのですけ
 れども。
 久我 労務調整の仕事をやったから、生産統制令を出す
 というのは、軍隊に農家が徴用されるのを抑えよという
 ことですから。
 豊田 生産統制令は16年の12月ですね。農林省で調査関
 係のお仕事に入られたのは、総括していえば、生産統制
 令に……。
 久我 最後はなるようなことなんです。
 豊田 そのためのいろんな準備をしてあったわけです
 ね。
 久我 特に労務調整の仕事が……。
 豊田 それに関係されたわけですか。
 久我 農林省で、農業の労働問題はどこもやっていない
 んです。「労働問題」というと、すぐいまの労働問題みた
 いに思われやすいけれども、そうじゃない、労務に関す
 る問題。要するに明治から、米を見て人を見ない農政で
 しょう。だから農民の問題、農業労働の問題を、農政が
 問題にしななんです。穴があいていた。

ところが、徴用だ、何だって、人を取られるから、ど
うしたって農業の労働の問題を考えざるを得なくなった
人手が不足してくるんで、生産に影響が出てくる。それ
でその問題をどこもやるどころがないから、官房の調査
室でやれということになつて、ぼくが担当してやってい
たわけですよ。やっていこううちに、どんどん徴用がひどく
なるから、何とか抑えようというので、農業生産のための
生産統制令なるものをこしらえることにした。だから、
これを出すことに對しては、一番反対したのは、徴用を
大いにやれという軍です。

ところでこれは法律でしょう、法律はぼくは苦手だけ
れども、おまえ、つくれということ。とうとう生産統
制令なるものをぼくがこしらえたわけだ。

豊田 公布が、昭和16年12月26日になつていますね。
久我 それまでの間に、さんざん企画院で会議をやりま
して、生産統制令を出していいか悪いか議論された。ち
ょうど徴用令の改正をやるという最中だったから、そっ
ちを農林省が賛成しないで、通さないでおきながら、生
産統制令を内部で一生懸命準備を進めて、最後に両方と
も提出させるというかつこうで、ようやく通したわけデ
す。だから、それに関連している軍人さんは、ぼくのこ
とを非常に憎んだんだ。

そういうことをやっていこううちに、戦争が12月8日に
いよいよ始まったわけだ。

豊田 生産統制令の原案をつくったところで、大平洋戦
争にぶつかった。公布が26日ですから、その直前です。
久我 企画院の会議を通さして、最後に公布が26日にな
るわけだ。そうやってありますうちに、戦争になっちゃ

ったわけだ。その8日に、企画院で会議が始まる前に、
 雑談しているとき、ぼくは「日本と米国では生産力が違
 う。初めの勝ちが奇勝ということもあるじゃないか『赫
 赫たる戦果』なんていつているけれども、この戦争は必
 ず負ける」といったんだ。そうしたら、片倉少佐とい
 う、15のときに首相を斬りに行った士官に平然として「
 待て」といつたという有名な少佐が、中佐が同かになっ
 てその会議に出ていて、ぼくが雑談している最中に怒っ
 て、軍刀を引き抜いて「直れ！」というわけだ。そのと
 きに、ぼくは、逃亦たりしたう斬られちやうでしよう。
 豊田 そのときに、そんな判断できましたか。
 久我 それよりも何よりも、フツとしちやって、彼をじ
 っと見ていたんだ。それでひょっと思ひ出したから「武
 界の批判ともつて、批判の武界にかえることはできない
 といったらう、なにっ」と刀を抜いている。そうしたら、
 森島という海軍中將が、「バカッ、軍刀をしまえ」とどな
 つてくれた。だから、片倉さん軍刀しまったよ。
 それでぼくは大変有名になっちゃって、あれは大変勇気
 がある男だといわれたんだけど、そんなことは本当
 はないんです。片倉さんが軍刀をしまったう、こっちは
 ぶるぶるふるえている。だけど、そこはみんな見てない
 い。片倉さんの方ばかり見ているから。「おまえも出てい
 け」と森島さんにならうれて退席したわけですが、これ
 はどうせ首になると思いました。
 ぼくは、前から近衛さんにいろんなことでお世話にな
 っていた。それには奇しき縁があるんです。2・26で
 牧野伸顕さんが殺されかけたでしょう。あの後、夜中に
 近衛さんから電話がかかってきて、「すぐに行つていいさ

ん連れて、箱根の別荘へ移せ」という。箱根に小さな別荘があったんです。

「何ごとで」と聞いたう「何でもいいかう、すぐ行って移せ」というので、ともかく牧野伸顕をあの家から箱根の家へ移した。それが朝の5時半ごろだ。だから反乱軍が6時ごろに行った時はもう(牧野伸顕)いなかったわけです。そういうことで、ぼくは2・26に関係あるわけだ。それは何かわかつたに、近衛さんにいわれてやったことですが。

豊田 久我さんは牧野伯王をご存じだったんですか。

久我 知らなかった。近衛さんの命令ということで行ったんです。

そういつたいきさつもあり、会議から追い出された後近衛さんのところへ行ったわけ。「あまえ、どうした」というから、実はこれこれ……と説明した。そのときにぼくは近衛さんという人は個人的には非常にリッパな人だと思った。平和論者だ。それはなぜかという、ぼくがその話をすると、「そうか、久我君、よくいったな」とえらいほめてくれた。「これで日本はおしまいだ」というようなことをいった。

だから、近衛さんが亡くなる日に親しい人が呼ばれたときに、ぼくも行っていましたけれども、近衛さんに戦争責任があるかないかといったら、近衛さんは「戦争責任はオレにもある」といった。平和論者であったけれども戦争責任はある。それは総理もやっていらんだから当然だ。その姿を認識していたという意味で近衛さんというものは非常にリッパな人だと思ふんだ。とにかくそれで近衛さんが、石黒忠篤さんに話して、会議でいっている

んじゃないん、始まる前に雑談でいつていふことについてとやかかくいうことはないし、もみ消してくれて、軍も知さまったんです。軍といてもごく一部のことだから「まあしょうがない。そのかわり、軍に全く関係のないようなところにあいつをやれよ」といつたという。農林省は騒いで、いろいろ考えて、ちやうど近藤先生が農林省から大学へ帰られたので、統計官のポジションが空いているから、あそこをやっちまえ。

当時は、専制主義の日本国家ですから、統計というのはいまだに行き場がない場所なんだ。あるとき、労務調整の会議を、部屋がないんで統計課長の部屋を借りてやった。それは近藤先生が大学に帰られたすぐ後です。課長がちやうど出かけていそがった。その課長のいすはりっぱなだけけれども、どの事務官もすわらない。統計課長だけはいやだというわけだ。だから「こんなりっぱないすがあいているの。それにヤオレがすわる」といつてぼくがすわった。それで後で統計課長をやることになったんじゃないだろうけれども……。

豊田 統計課長は長くやられましたね。

久我 そういうことがあるくらいに、みんな統計課長になったらおしまい——本当におしまいだった。局長にも何も存ねない人があったんです。表向き者だとか、何んだとか三州さんなんかその代表的な人です。そういう人があったんですから、みんないやがったわけですよ。農林省の中の特殊部落みたいな扱いを受けていたんです。とにかくそういうことで、おまえは統計へ行け。ところが統計へ行くというのは左遷みたいなものですから。それまでは判任官でしょう、今度は高等官にしてやるんだか

う行け。ぼくはそんなことはどうでもいいけれども、軍人ににらまれちゃったからしょうがない。それで軍人に一番関係のないところへ行くというので、統計課へかわった。これが統計をやり出した初めなんだから、何も特別な関わりがあったわけではないんです。

豊田 ちよつと前後するんですけども、労務調整のための調査はどういうものでしたか。何年からでしたか。久我 戦争の前だから、15年ごろにやった。統計の方では、農家までは調査しているけれども、人は調べてないから、人のことをまず調べなきゃいかぬというのでやったんです。

豊田 戦前のものとしては、あのデータが、当時のわが国の労働力の状態を示すものとしてよく使われますね。

久我 生産統制令の一番しつぽに、労務調査をつけ加えて、労務調査を生産統制と一緒にやるようにしたんですが、前から調査はやってあったわけですよ。

豊田 たしか15年かそにかのデータもあったと思います。私もその後、農村の労働力の問題をやってきたのですが久我さんがその時期にそれに携わられたのは、考え方として、後の伏線になつていゝと思うのです。

久我 統計を私にやらせてもいいじゃないかということになつたのは、そういうものをやっていたからでしょう。だから、統計課の方でも、長畑さんも、あれをういゝということになつて、ぼくは統計に行けたんだと思うんです。

豊田 戦後、それがあゝ意味ですつと尾を引いたと思つてゐるんです。

久我 戦後の一番初めに、農家人口調査をやったからね。

統計をそういうことでやり出したけれども、戦争に最も
も関係ないところといつても、やっぱりそうばかりもい
かないんだ。何かというと、軍はクチをつけてくるわけ
です。

「つえらい怒られたのは「おまえは馬は矢張りだとい
うのを知らないか。馬の統計を発表するとは何事だ」とい
われた。馬の統計をどうして出していけないのか。戦争
に使うかうっていったって、そんなものは問題ないじゃ
ないかというんだけれども、馬政局というのもできてい
て、ものすごく怒るわけです。何でも秘密にしろという
ほくは仕方がないかう。「わかった、それじゃ馬の統計を
出すのをやめよう」、それでサル知恵を出して、大衆畜に
関する統計をこしうえまして、うろ牛何頭、あとは計算
すれば、もともと馬と牛を足して大衆畜というのを出し
たんだかう。馬の頭数を知りたい人は引き算すればいい。
そういうことで出した。

軍人さんはくやしがつたけれども、これは馬が出てな
いんだかういいんじゃないか。軍人さんというものは形
式主義だから、出てないものはしょうがないということ
になった。

豊田 たしか農林統計年表にも、馬の統計公表停止とい
うのがあったと思います。

久我 しかし、それを出さないと、馬の統計がとだえて
しまうでしょう。

豊田 家畜統計がなくなりそうですね。

久我 通産省は、その当時は軍需省にでした、工業統
計はあの戦争の末期にはズクズクで、事実上存在しませ
んでしたよ。ところで、統計というものは取て置きや全

く意味がない。公表しなきゃ役に立たないんですから。
 何とかして公表したい。そういう一念から、大衆畜の統計をこしうえたんだ。軍人さん、くやしがったね。
 もうノッパは、海軍にやられた。当時、小型汽船も、有動力汽船、無動力汽船と分けて出していた。そうしたら有動力汽船を発表するのはけしからぬという。要するに戦争になってから、有動力汽船は全部無線をつけろと海軍がいつて、海軍が補助してつけさせたから軍用だということでしょうね。そこでバカなことをいいをさんな、敵はとにかく（船も）バンバン沈めて、引き算すれば、日本は新しく建造なんかできないんだから、現在数は正確にわかってちゃうじやないか、知らないのは日本国民だけになっちゃう。しかも、いま国民は、こんなものに何も関心を持っていないです。将来、日本がずっと続いていったときに、あのときどうだったかということがわからなくなるかと困るんだ。馬は軍の機密保護法に触れるかしらないが、汽船は触れないじやないか。だから、オレはやめなさいとって、続けて出した。
 そういうことで、軍人さんと相変わらずずけんかをしてでも、当時の長畑統計官は、いいやつが来てくれたというんだ。軍人とけんかするのはおまえに限るよなんて。先生は、オレはこわいからいやだよなんて、出てこないんだ。ぼくばかりが常にやっていた。
 豊田 当時、統計課では、長畑さんと……。
 久我 ぼくと 又人しか統計官はいなかった。あと課長がおりました。
 豊田 堀田さんとか、鈴木隆治さんとか。
 久我 統計官補、判任官であった。

豊田 統計課は何人ぐういたったんですか。
 久我 人数は相当いたよ。計算するお嬢さんがたくさん
 いた。近藤先生の意見で、IBMの機械を農林省に入れ
 てあったですから、そのパンチャーが大ぜいいた。IBM
 Mについても、おもしろいことがあるんだ。
 豊田 IBMはいつ入れたんですか。
 久我 近藤先生のとさだ。
 豊田 近藤先生は、たしか14年から16年の3月ごろまで
 ですね。
 久我 IBMは近藤先生が入れられたんです。農林省と
 通産省に入っていました。農林省ではその関係で女性を
 大ぜい使っていた。戦争で労働力を総動員しろといい出
 したときに、女性でも働けるんだという例え、農林省の
 統計課に見に行けというので、参謀本部の軍人が見に来
 たんだ。しかも、アメリカの機械があるというが、どん
 な計算をやっているのかというわけです。
 そうしたら、参謀肩章とか下げたのが見に来て、「あつ
 と驚いた。何かと思ったら、IBMの機械を見て「これ
 は何をする機械だ」という。「計算する機械です」そんな
 ことはない。コレヒドールの要塞にもウエーキの要塞に
 もあった。だから、軍需上必要の機械だ。軍隊が計算な
 んかするはずないじゃないか、いいかげんなことという
 な」「だけど、こういう機械なんだ。もしそうあつしやる
 なら、あるいはアメリカの暗号は数字いやないんだらう
 か。数字を決めておいて機械に解読させる。とにかく非
 常なスピードで解読するわけだから、そういうことに使
 っているんじゃないでしょうかとぼくはいった。「全く
 わかりませんけれども、そうではなや。軍事用に使える

ということば、ちよつと考へられない。「それに違ひな
 い」といって、重要機械というのに指定して、直ちに東
 芝だとかに、軍は製造命令を出した。それで東芝の人
 なんか「これ、何ですか」とみんな見に来た。(笑)
 戦争がいよいよひどくなって、最後には、ぼくは軍隊
 に召集されて行っちゃったから、終戦のときにいなかっ
 たんですが、終戦のときに長畑さんががんばって、この
 機械はそのまま残すということにした。軍が、機械をみ
 んなをこわしてしまえというんで、通産省は、こわしちや
 うわけにもいかないので、隅田川に沈めたんです。IBM
 の入っていたところは、相当あつちこつちでみんなこ
 わしてしまつた。農林省だけは絶対にこわしてはダメだ
 とがんばって、残したんです。それで、戦後ぼくがアメ
 リカに行つて、IBMを訪ねたときに「農林省だけが、
 日本で唯一のリッパなカスタマーだ」といわれた。
 豊田 「統計夜話」に書いておられる。
 久我 「ちゃんど保存してくれだ」といって、大歓迎し
 てくれた。そういういきさつがあるんです。
 だから、そういうことで、軍隊と関係ないというわけ
 には、やっぱりあの最中だから、ついにいかなかった。
 豊田 統計機械については、私も思い出があります。私
 戦争の末期に大学院にいたんですが、戦争が終わ
 った直後に、軍需省などの統計計算に動員されていた学
 生が、私のところへきて、戦利品の統計機械を主計大尉
 が、大学へ持つていってモカマわなないといつていふとい
 う話をしたわけですから、私は喜んでその話に乗ろうとした
 う、学部長に怒られちゃった。「東大に戦利品なんかあつ
 たら、どういふことにならと思うんだ」と。そういう

思い出があります。コレヒドールさんがかう持ってたんですね。十分使ってはいなかったようですけれども。久我 使ってはいなかった。わかんないんだもの。暗号解読にたぶん使うんであろうと、ぼくがいっただけで、重要機械に指定したじういですかう。

豊田 暗号解読に使ったかどうか知りませんけれども、向こうは絶えずいろんなコントロールのために計算をやっていたわけですかう。向うどこへどれだけ運んだという計算を絶えずやっていた。そういう戦争のやり方だったと思うんです。

久我 そういうことがありまして、だから、ぼくが統計をやったのは偶然で、近藤先生が大学に帰られた後、近藤先生のポジションを継いで、課長いやないけれども、統計官になったということなんです。「統計夜話」にも書いたけれども、戦争中は、統計はだんだん崩壊していくわけですよ。何とかしてこれを維持しようとしても、ダメでした。軍閥の力というもので、統計は要らないというんでおしまわれた。東条さんだつて、怒ったんです。

ただ、おもしろいことが、米の統計についてありまして。

豊田 米の統計は、戦後重要な問題になりますが、近藤先生へのインタビューで伺ったんですけれども、戦前官房統計課で米の統計だけは、非常に正確であるという自信を持っていたということです。それは実際1~2%の誤差で、推定されていたと思うという近藤先生のご意見でした。

久我　　そうだったでしょう。確かにリッパなものだった
です。

豊田　　それが、戦争中崩れていったことについて……。

久我　　近藤先生が大学へ帰られたころ、ある意味で近
藤先生がいるのが邪魔になってきたということと、そう
いうこととは関連していたでしょうね。有馬さんは、も
う大臣をやめていないし、農林統計改正も終わってたから
帰るといって、先生は大学へ帰られたんでしょうけれど
も、近藤改正によれば、すべての農林省の統計は、資源
調査法に基づいてやるということと。あったわけですね。

ところがそのときに、戦争で統制がだんだん進んでき
たから、食糧庁で、米の統計だけは絶対に食糧庁がやら
にや困るといい出した。そのときの最後の食糧長官は湯
河さんでしたけれども、その前に石井さんなんかをしき
りにそういつておられた。しかも、その理屈は、生産高
の統計は要らぬのだという。なぜかという、統計調査
をやつて出さなくてもいい。統制が進んでいるんだから
農家の保有量は決まっている。あとのものは供出してモ
ううんだ。その供出の量はわかるんだから、それを保有
量に足したら、正確な生産高がわかるじゃないか。だか
ら、調査をする必要はない。こういう理屈で、食糧庁が
米の統計の改正の部分だけ押さえた。

結局、官房の統計課が食糧庁に負けたわけですね。それ
で米の生産高の統計の一部分——結果から出てくるのが
生産統計だというのなう、それじゃ予想は出せないだろ
うというわけで——予想は統計調査かもしらぬから、官
房統計課でやれ、作付面積も統計課。しかし、生産高は
食糧庁の方で、結果から業務統計として出るんだから、

統計課で出してはいけな。統計の数字と違うものが出
るや困るんだ。そういう理屈で、米の統計が分裂したわ
けです。このこと自体、統計の力を非常に削減するもの
で、だんだん戦時統制が進むにつれて、いよいよ米の統
計がダメになるものになったのです。

同時に、このことは官僚主義とも関係することでした。
以前かう、食糧庁としては、米の検査の職員が米を検査
するのは一時期だけで、米がとれた時期しかない。あと
何かやうしてないと、困るわけでしょう。それで調査
をやうした。ところが、官房の調査と統計の面でぶつか
る。片一方は、資源調査法という法律で決まっている。
これはじあい悪い。だから、米の生産高は食糧庁の業務
かう出るんだかう統計調査は要らないという議論で抑え
た。それでいて実は、自分うで埒刈りかう何かう、調査
をやっていたんです。

豊田 食糧庁の方では事実上調査をやっていたわけ下さ
ね。

又我 要するに、他人にやうれていたんじや困るわけ
です。地方長官との交渉だの何だののとき、「米の生高はこ
れだけあるじやないか」といつたって、「統計上こうなっ
ています」と、統計で抑えうれうや困る。果ごとに、あ
の県はもつとこうやってやれとか、そういうのを合理的
な根拠なしに、あの県の知事は農林省に刃向かうかう少
しこうやってやれとか、現にそういうふうにやっていた
んです。そういうことをやるのが政治だなんて、農林大
臣もやっていた内田信也は平気でいっていたこともある
ぐらいだった。官房の統計課で別に調査して数字を出さ
れたら、そういうことを全然できなくなっちゃう。それ

がもとなんです。

だから、戦後、生産費の調査も、米の生産費も含めてみんな統計でやるようになったとき、それについて、食糧庁が最後まで非常に反対したんです。そのバツフモされたのは荷見さんです。

「統計というやつは、近藤以来けしかうぬ。調べた結果をみんな外へ出しちやうじやないか。生産費の調査の結果をんで、食糧庁だけが持っていればいいものだ。それを公表するなんて、敵にどんどん渡すようなものだ。そういうことなんですぬ。統計も民主的に、だれでもみんな見ていいようにする、そういう思想がいかぬという考え方です。戦後でも、荷見さんなんかそういわれた。そういう人が中心になって、食糧統制を進めてまたんだから、統計のやり方は邪魔になったわけでしょう。

それで、米の予想の話ですが――。

豊田 面積調査と予想は、統計課の才でやったわけですね。

久我 それで非常におもしろいことがあった。当時米の予想調査を二度やっていただけです。そうしたら、また軍が、「いまだに二度もやるなんて何だ、ノ適でいいじやないか」という。軍は、ともかくみんな隠したいわけです。「何でも節約せにやいかぬときに何もやっておる」という。しかも、統計がうはぼくが会議に出ていつておるから、よけい軍が怒ったのかもしうぬ。

じゃ、ノ因にしようかということにして、しかし、統計は米の予想を天皇に上奏することになっていた。上奏章という部屋があったぐらいです。だから、一応宮内省に断らにやいかぬだろうと思って、軍がこういうから、

二回を一回にしようと思うという話をした。そうしたら
 宮内省は目の色を変えて、バカなことをいいやさんやと
 いう。「あんたは社会運動だの何だの昔からやってあるか
 う、そういうバカな思想を持っているんだろう。二度あ
 る意味を知らないんですか。新嘗祭と神嘗祭のときに
 天皇が神様にこれだけとれると思うと報告する数字で
 すよ。それが一回になつたらどうしますか」と怒るわら
 った。「そうですか、それは申しわけありません」と
 帰って、今度は会議で「やっぱり二回を続けてやる」と
 いったら、また軍が「一回にするといつたのに、何だ」
 と怒るから、「だって、天皇陛下が困るのには、軍はい
 いのか。新嘗祭と神嘗祭に神様に報告される数字をそく
 して、あなた方がいいと思うのか。それでも天皇の軍隊
 か」といってやった。そうしたら、「そういうものだった
 ら、なぜ早くいわぬか」と怒っていたけれども、一回に
 することはできなくて、二度を続けてやることになつた
 わけです。そういうバカなことがありました。こっちは
 そういうものとわかってたんですが、大変だった
 ですよ。

三洲さんのときの有名な話は、所田さんという農林大
 臣のときのことだったそうです。

豊田 民政党の「のんきなとうさん」といわれていた人
 ですね。

久我 そのときに、天皇陛下が出てこられる時間に間に
 合わない。どうしてかという、その当時、農林省の統
 計課に書家があったのです。1年に2回か3回しか書か
 ないけれども、囑託として、上奏のときに上奏室で書家
 が文書を書いて書いたものです。

豊田 それは近藤先生に、画家だったと訂正されました。
 文書に添えてさらさらと絵をかいたんだそうです。
 久我 ほくらのころは、書家ですよ。永田鶴風という書
 家です。もとは画家がおったかもしれませんけれども。
 豊田 あまり殺風景だから、文書に添えて絵をかいても
 うったんだという近藤先生のお話でしたけれども。
 久我 そうではなしに、書家が文書を書いておりました。
 それを三洲統計課長が「そんな囁託に書いてもうったん
 ではいかぬ、役人が書かにゃいかぬ」といい出した。当
 時の判任官の親玉で統計官補に任っていた市橋さん、後
 に新潟の統計課長を長くやっていた人に書けというわけ
 だ。その人は馴れないし、やっぱり当時のことですかう
 上奏文を書くというので興奮して、徹夜してもなかなか
 書けない。
 それもとにかく書きあげて、ようやく町田さんが持っ
 て宮中に行った。筒に入れていったが、あわてて持って
 いったら、どうしても筒から出ないんだそうです。そう
 したら、のんきなとうさんが、いきなり靴を出してポン
 ポンとたたいたら、筒から出た。(笑) 天皇もびっくりさ
 れたということと、後で統計課長をやっていた久保さん
 に聞きました。久保さんが侍従であつたらしい。市橋さ
 んは青くなった。それで、あんまりやなことという課
 長はダメだというので、三洲さんは飛ばされて、かわつ
 たんだそうです。統計課長は、そういう一風変わったの
 ばかりが来ていたらしいです。みんな法学士ですからけ
 れども、戦争中は、実際、米の統計の数字が減ってくる。農
 民の政府に対する不信はつのるばかりですから、減って
 くるわけだ。それに対抗して、実際はこれぐらいの生産

高があるはずじゃないかということ、いろんな幼稚な
 エステイメートもやって、何とか米の統計を維持しよ
 うと努力したんですが、結局、ダメでした。

県から出てくる数字も、県に直さずにやろうね。

豊田 直定したわけですね。

久我 だから、県を呼んで、「この数字はおかしいじゃな
 いか。去年とここの面積を比べてみて、こんなに減っ
 ているわけないじゃないか」というように交渉した。初
 めの頃は、水田の面積は減っていないで、水稻の作付面
 積だけが極端に減っていたものだから、「水田には水稻の
 ほかにクワイヤ何かそんなに作けられているのか、お
 まえの県はクワイ県になったのか。戦争中なのに、米を
 全然植えないで遊ばしている田舎であるのか」とかさ
 んざんいって、県を困らせて、あんだのところは間違っ
 ているから直してこいといつて、これは事実上命令です
 よ。県も仕方ないから直してくる。

知事なんかもくやしがつて、翌年になると、今度は両
 方減らして持ってまたかう。水田の面積と作付面積の間
 に矛盾がない。だから、今度は町村別の報告を持ってこ
 いとやった。すると、県全体の数字だけ直してあって、
 町村別はまだ直してないから、矛盾がみんな出てくる。
 「おかしいじゃないか。おまえの県はクワイ県か」とい
 うようなことをまたやった。

だから、3年目になると、全然ダメです。町村別もち
 ゃんと県が直して持ってきちゃうから、抵抗できなかった。
 一方で、供出をどんどん強化してやっていたんだ
 から、とうしたってそういうことになるを得ない。
 こういうことで、統計は、実質上もだんだん崩壊してい

った。それで終戦を迎えた。

豊田 終戦の前に久我さんは軍隊に召集されたんです。
よう。

久我 ぼくは、20年の5月1日に召集されて、海軍に引
つ張られて、横須賀の海兵団に1週間いました。それか
う神奈川県の座間近くの松根油部隊に移った。

そのうちに、松根油を分析する兵隊が要るということ
になった。松根油が、飛行機が飛べる唯一の油になっ
ちゃったから、松根油がどれだけの成分であるかという分
析をする必要が生じた。そのため大学出のやつはいない
かということになり、たまたまぼくは松根油部隊にいた
かう、おまえ、来いというわけで、最後に厚木の航空隊
にいたんです。だから、毎日のように爆撃があった。そ
こで、松根油の分析をやうされていたんです。

豊田 いっ召集解除に？厚木だと早かったでしょうね。

久我 マッカーサーが来るというんで、一番先に8月23
日に除隊になった。

これはよけいなことだけれども、その前に混乱があっ
たんです。革命というのは、ああいうものじゃないかと
思う。厚木には、葉室という硬骨の大尉がおりまして、
これは戦争継続論者だった。終戦の詔勅のときに、ぼく
は海軍に入って初めて制服を着て、整列した。あとはふ
だんは葉っぱ服でした。そうしたら、「やむを得ざるもの
で終戦でしょう。本上決戦するんだから、みんな陛下の
お言葉を聞け」というわけで、兵隊が整列した。そうした
う、停戦だということになったから、訓辭を与えたあそ

この隊長の何とかいう中将は、ホカンとしらやって何も
いえやい。いま、戦争を継続してやるんだとみんなに割
辞したとたんに、陛下が、やあるんだという話だ。そう
したら、葉室大尉が出ていって、「どけッ、いまのは重臣
どもの策謀にすぎない。オレは天皇のお声を知っておる
けれども、お声が遠う。だから、全員部署につけ！」と号
令を出した。だから、みんな部署についたけれども、そ
の日まで毎日爆撃に来たのが、アメリカ軍の爆撃がない。
部隊の中央の将校室にあかあかと電灯をつけている。「将
校室が電灯をつけているぐらいだから、やっぱり終戦だ
よ」なんて、ぼくらはいつていた。

そうしたら、その葉室大尉以下、ゼロ戦で二十何機、
隊長が「いかぬ、いかぬ」といつていたけれども、みん
な飛び上がって、そのまま海へ突っ込んで死んじゃった。
厚木の航空隊の硬派の何人かが、最後に死んじゃったわ
けです。

隊長がダメな人で、そういう事態だから、中は混乱し
て、15日から23日までの間、どうしていいかわからない。
海軍ではどろぼうに行くことを「ギンバエ」というので
す。「ギンバエに行つてこい」という命令を出すと、「ハイン
と行くわけだけれども、海軍は、普通の兵隊と別に主計
兵というのがある、これがみんな物資を貯っている。兵
隊同士で「頼むから、これをちまうだい。終戦になるの
に、物はいっぱいあるんだ。どうせアメリカがとるんだ
からいいじゃないか」とかいつて、分けてもらうてきた。
そのうちに、酒をもらつてきたやつがいる。兵隊が酒を
飲んだいとおいで主計兵のすまをついてソーフと押しか
ければ、酒が手に入るぞという話になって、実際そうい

うことをやり出した。それで兵隊をとめるのに下士官が
 動員された。ところが、「あいつう、ふだんからオレたち
 といいめやがって」と、下士官のいない部屋からたくさ
 んあった精神棒を、兵隊が持ち出しちやった。酒は飲ん
 でいるし、武器は持っているから、「どけ、どけ、もうお
 まえうが償いわけじやない」と、物をとりに行く。そこ
 で下士官ががんばっている、「あの野郎、この間やりや
 がった」「そうか」と、みんなで袋だたきにして、あそこ
 の下士官は4~5人死んだ。戦死にやっているけれども、

そういうことで混乱が起こって来て、どうしても早く
 帰さざるを得ない。それに厚木にマフカーサーが来ると
 いうことで、一番先に除隊になった。アメリカに物を全
 部とられちやうという気がみんなにあるものだから、除
 隊して帰る者にみんなくれるわけです。「車に乗れるやつ
 はいるか」ときかれたとき、ぼくは若いころから運転し
 た経験はあったけれども、運転できるといわなかった。
 あれはいったうよかった。(笑)

そのうちに、車の運転ができて千葉に帰る兵隊が現れ
 て、おまえも東京に帰るなら一緒に乗って帰れというこ
 とになった。といつても、車に山のようには物を積んであ
 るんです。それで、その上に乗って帰れというから、し
 ようがない。そうすることにして、ガードへ来るせ、縄
 を伝って車のゆきへおる。(笑)そして、ガードを静々
 と越え入ると、また上へ上がる。そういうことを繰り返し
 ながら、ぼくは、千葉へ帰る兵隊4~5人と一番先に帰
 ったんです。家族はみんな疎開していて、ぼくは召集さ
 れたときに杉並区の新木町にあったから、ぼくが一番
 早く戻ったわけだ。家に着いたとき、積んでいた物資の

一部を、「これはおまえにやる」といわれた。こううは欲
 はないかう「もう結構であります」とことわったんだけ
 れども、ぼくが一番下なんだかう「ダメだ」といつてお
 しつけられてしまった。高く物を積んでいて上に乗った
 う危なくて邪魔だかう、「これはおまえにやる」と、おし
 つけられちゃったわけ。それでいっぱい衣嚢をもうって
 しまった。近所の人が、びっくりしながらう家へ運んでく
 れました。あとであけてみたら、いろんなものがある。
 米もあるし、みそもある。毛布もある。みんなアメリカ
 にとられるんだという意識があるかう、自分がふだん着
 ていたやつを残して、将校用のいいのをもらったもので
 す。しかもぼくはいま述べたようなわけで山のようにも
 らってしまった。ぼくは、タバコを非常に吸うが、軍隊
 の「ほまれ」というタバコが衣嚢に5つあった。だから
 役所に帰ってから、ずっとタバコだけには不自由しな
 かった。アメリカの兵隊が洋モクと取りかえっこしやう
 じゃをいかといつて喜んで交換してくれた。洋モクの方
 がずっといいですかう、取りかえっこしたりしました。
 兵隊に行くときに、また1つ問題を起こしちゃった。
 統計課のお嬢さんなんかたくさん来て、送ってくれたん
 だけれど、そのときに「私はこの戦争は無意味だと思っ
 けれども、召集だからやむを得ない。残念だけれどもこ
 れから行く」とあいさつしてしまった。そうしたら、送
 りに来ていた在郷軍人や何か怒って、「こんなやつ、駅
 まで送っていつてやるないというかうこつちも「来ない
 でうまうどいい」というわけで、それで召集されて行っ
 たんです。こんなこと軍隊が聞いたう、どんなに怒った
 かしうないけれども、最後のころのとさくさで、両種合

格を採るようなときでしたから。――

豊田 20年5月といったら、もう空襲が始まっていたときですね。3月にも、5月にも空襲があったときですか。もう混乱していましたね。

久我 バカな話さ。それで松根油をつくらせて、イモも植えていた。終戦になってから、そのあたりへ買い出しに行っていたことがある。そうしたら、「海軍さん、本当にイモ植えたのかい。ノッもなっていない」。 (笑) いやいややつているんだから。なっているわけがない。あれで戦争が勝てたら大変だ。(笑)

豊田 復員して、役所にお戻りになってからの官房統計課、農林統計の話など、作報組織の設立の前段のところまで今日はお伺いしたいと思います

久我 復員して帰りました。長畑統計官も生きておられて、われらの時代が来た。民主主義の時代が来たぞというわけで、物はなかったけれども、長畑さんも私の復員を喜んでくれました。それで、これから統計の再建を何とかしようじゃないかというて話しあったものです。

そのうちに、ぼくは、突然GHQに呼び出されました。ぼくが農林省で一番初めに呼ばれた人間だったんだ。だんだんほかの者も呼ばれるだろうけれども、何で統計が一番先に呼ばれたのか、みんな心配した。そこが、やっぱりアメリカですね。9月の半ばごろじゃなかったかな。

豊田 GHQが機能し始めたのは、その頃からでしょうか。

久我 それで農林統計を持ってこいというわけで、持っていた。2世がいて、統計の一切についてこれは英語では何に当るかと質問された。そして「あまえも説明し

たことを書いておけ、たびたび呼ばれるだろうから」といわれた。中には、わかうそいのもありました。そういうふうにして数字の一々について説明をしろということをやったわけです。

豊田 それは、どういうポストのどういう人だったんですか。

ス我 後に天然資源局になっていったんだけど、そのときはまた、マツカーサー司令部の軍医のものです。

豊田 行政官とか、統計の専門家とか、そういうものじゃなかったんですか。

ス我 一番先にやったのは、畜産関係なんです。

豊田 農林統計では、畜産の部が分かれているでしょう。畜産というのは英語では何に当るんだというから、ライブストック・インダストリーだと答えた。ところがその後で農業の方をアグリカルチャーだといったら、又世がブーッと吹ま出してしまった。又世がいうには、「あまえは馬がう落うて落馬したとiotてるといふんですよ。つまりアグリカルチャーというのは、当然畜産が入っているんだ。ライブストック・インダストリーなんて、そんなインダストリーはないという。それでグシャッとまいった。

しかし、近ごろの農業基本法以来、やっぱりライブストック・インダストリーといった方が、日本の畜産についてには正しい。あれは農業じゃない。だって、農業は、土地生産だということが大事でしょう。ニワトリをビルディングの中で飼っていて、鶏権をじゅうりんして卵を取る。ぼくは、ニワトリの調査で大阪へ行って、えらく怒られたことがあるんです。農家のニワトリの調査方法のパイロット調査だったんですが、「あれわれは農家じゃ

ない。採卵業者だ」といわれて、犬と飼っでいて、吠え
 まじで、われわれを近づけてくれないということがあっ
 た。けれども、あれは本当にライブストック・インダス
 トリーだ。だって、農業利潤を追求しているんじゃない。
 あれは一種の商業利潤の追求でしょう、厳密に言えば。
 豊田 商業利潤の部分の方が大きいかもしれません。
 久我 産業分類でいったって、いまモヤシの生産は農業
 じゃないもの。あれはオガクズの中で栽培するんだから
 たしか農業に入っていないよ。商業でしょう。
 豊田 産業分類ではそうでしたが、農業センサスでは、
農業生産に入れていますよ。
 久我 農家がやっている以上、それはいいですよ。農業
センサスでは、シイタケのことで林野庁長官に怒られた。
 シイタケは、農産物じゃないというんだ。そこで、林野
 行政上はシイタケを林産物とみてもかまわないけれども
農業センサスでの扱いとしては、農家がシイタケを生産
 しているのだから現に、いまシイタケを栽培するのに、
 シイの木の下でやっているわけじゃなくて、松の木の下だ
 ろうが何だろうが、^{ほく}木と並べて生産しているのだから農
産物に含めることとする。「農家がそういう生産手段で栽
 培しているんだから、これは農業ですよ」と答えたわけ
 だ。
 そういうことがあるから、モヤシは農業生産でなくても
 も構わない。けれども、いまの畜産を見てごらんをさし
 土地生産じゃないんだから。
 豊田 この問題を久我さんと議論し出すと、大変時間と
 ってしもうことになるので、ちょっとだけ触れてみた
 いと思います。喜多さんが一昨年アメリカへ行って、ア

アメリカの農業統計をめぐり最近の事情を調べてみた。アメリカではこれまで一貫して農業といわないで、全部ファームをベースとしてデータをとっている。ところがそれではいまはグメだという主張が、最近非常に強くなってきたということです。アメリカ農業の分解が非常に進んで、アグリセジネスと呼ばれる部分が大きくなっていく。要するに資本支配の増大ですね。畜産が工場的になっちゃっている。ファームにおける畜産でなくなってきたということです。だが、久我さんが司令部に呼ばれたとき、二世がワッと吹き出したのは、彼はファームの生産物を考えていたと思うんですね。だから、家畜はファームにいるのはあたりまえなんでコーンディリイとかコーンホッグとかそういう形態が彼の頭にあったわけでしょう。

ところがそれが資本に支配されて、工場的なものになっちゃったんで、ファームの概念じゃ間に合わないという批判が、いまお出ているんです。それを喜多エんが王様に整理して、論文を書かれましたので、ぜひ見てください。いま久我さんの話をお聞きして、ちよつと思い出したわけですね。

久我 だから、アメリカのセンサスの結果の中に、ファーム・クロップの中に魚が入っていたりする。ファームの中の漁場でとったものは……。

豊田 ファームという形態が前提で、家族経営、ファミリーファームの中の生産物ということですね。

久我 だから、魚があってもいいし、

豊田 木材があってもいい。

久我 ピックアップクロップだとか、ずいぶんクロップがある

オレはビッブフロップというかう、トウモロコシのこ
だと思ったら、そうじゃなかった。そういうことで笑わ
れたりしながう、とにかく農林統計の説明を数回にわた
ってやりました。それがGHQと触れ合う一番初めだっ
たんです。

そのうろに、天然資源局ができて、そこにギル・マー
クン大尉というのがいた。彼はぼくを呼び出して、日本
にいまどんどん帰還兵が帰ってきている、産業はほとん
どないようだ、これは社会の不安のもとになる、だから
日本の農家では一体どのような状態で農業が営まれてい
るか、農業センサスをやろことは容易じゃないだろうか
う、とにかく人間の問題だけについて、いかなる状態で
あるかということに至急把握して、報告しろというんだ。

そういわれても、至急にできるわけがないけれども、
農家人口調査をやろという案を立てて、GHQがこうい
う命令を出しているんだからといって、農林省の中で農
務局の力を集めたりをにかして、ぼくは、調査の準備
をしてあったんです。そうしたら、川島統計局長が、農
家人口調査をやろとは何だけしかうんとどきり込んでき
た。そして、古証文を出されちゃった。昭和4年の農業
センサスを計画したときに、人口に関することは農林省
では調査いたしませんという覚え書きが、農林省と統計
局との間にあったんです、あのころは農林省は農家だけ
考えればよかったわけです。行政は農家を対象にする。
個々の農家人口を調べることは、統計局にお任せします
という約束がしてあった。石黒忠憲さんの判が押してあ
るのを見せられたわけ下す。おまけにいまGHQは、日
本の人口も至急に調査して、報告せよといって、統計局

の方にディレクティブが来ているんだ。それなのに農林省が勝手に農家人口の調査をやるとは、昔から約束違反でもあるし、そもそもけしからぬじゃないかというわけで、えらい勢いでどなりこまれた。

話を普通にしてくれりゃ別なだけけれども、こっちは斗争することが好きだから、「それに」ということになった。統計局に対してはサムス大佐というのがいて、人にも互急に調べろというマツカーサーの命令がそのルートが出てくるのは、あたりまえです。ぼくの方は天然資源局が窓口で、同じ問題を考えていても、人口に対してはアメリカの中でも天然資源局系統の行政機関には権限がないわけだ。だから、農家の状態を調べることにして農家人口も調査したらどうだろうとやってきた。

本当をいえばそういうことであるけれども、そういうのを統計局とけんかせにやろうぬ。私の方だってGHQからうってきただんで、農家人口も調査しようといっているんじゃないかと、川島さんとぼくと大げんかした。それを「まあまあ、そういわないで、何かうまい工夫をしようや」といったのは、大沢課長だった。局長とまだ課長でもない一統計官とえらいけんかした。だって、ぼくのところに来てどなりつけるんだから。GHQへ行って交渉しているのは、ぼくだったから。

じゃ、何とか一体になってやる方法はないかと、ギル・マーチンと話した。そうしたら、サムス大佐が、「それはわけない。農業のことを細かく聞いた方が、なるほどいいだろう。人口センサスを全部やって、農業をやっているかどうか聞いて、農家だとわかったら、それについての詳しいことはおまえの方でやれ」ということになっ

た。それで、両方合同でやりましようということになっ
たんです。

豊田 21年4月26日の調査ですね。

久我 けれども、だんだんやっていくと、困った問題が
出てきた。統計局は人口を正確に押さえるという昔のド
イツ式の考え方でしよう。だから、何月何日午前〇時現
在の現在式の人口。

豊田 戦前からの現在人口ですね。その後、常住人口に
――。

久我 ところが、われわれの方ではそれだけ困るんだ農家に
その日現在いたって、農家と関係ない人が来て泊っても
農家人口の中に入ったり、農家の世帯員であるけれども
たまたまほかへ行ってゐる人が扱けたりするのは困るで
しょう。属性人口でなきゃ困るんだ。そうしたら、統計
局の方は、そんな人口調査があるかという。しかしこっ
ちは、配給だの何だのに使いますといったって、現在主
義の人口調査で配給に何に使えらんだというわけです。

食糧方は人口調査を自分でやりたいから、このときほか
りは統計課と一緒にあって、「そのとおりだ、現在主義を
んか使えるわけがない」「いや、内閣は正確なものを押さ
えるんだから、伝統的に正確なものでなきゃダメだ」と
結局がつかない。結局両方あるのもやむを得ないという
ことになって、川島さんも折れた。こういうことがあっ
て、あの人口センサスをすることになったんです。

ところが、農家の人口調査をやろうとしますと、労務
調整令のときにはほくはある程度農家の労働力に関する調
査をやっただけなんですけれども――。

豊田 あの調査は計画の調査で、実態の調査じゃなかつ

たすね。

又我 農家の定義までは、近藤先生の改正でリッぱにできている。ところが、農業従事者ということになると、一体どこまでが農業労働なんだか決めにやろうない。たとえば、近ごろはそういうものはないでしょうが、生産した野菜を毎日娘さん二人で千葉へ振り売りに出ている。こういうのは、一体農業労働かというわけだ。そもそもそれをやっている行為は農業に従事することか。そうすると、共同炊事に出ているあばあちゃんも農業従事者なのかということになってくる。

それでしようがないから、経営不可分一体の原理というところを、ぼくはいい出した。そんな原理があるかどうか知らないですが、振り売りを農業の中に入れなきゃ、農業が完結しない。これを商業だとすると、農業と商業と兼業になっちゃう。やむを得ないから、経営不可分一体の原理で、この行為は農業である。そういうことを一々決めてかざるを得ない。そろほど近藤先生が、人口に手をつけたら大変だ、いまの農林省の行政からいって農家の枠でいいんだといわれたのは、無理ないです。

戦争になって、統制をやり出すと、人を対象としてやらなくちゃできないでしょう。そういうことで統制経済の発展につれて、だんだん人の問題を追求せざるを得なくなってきた。だから、属人主義か、属地主義かというのもある。あの戦争につれてだんだんおかしくなったんです。

現にこの、行政上も問題を起こしたことがある。兵庫県の山間部の和岡村というところで、そこでは米もつくっていますけれども、厚生省に指定されてさかんに薬草をつくらせていた村なんです。あの当時は属地主義だから

その村々大部分畑で、田んぼはゆずがしかないことにな
っていた。ところが、その農民は、大部分隣村へ水稻
の出作していたわけです。そこで肥料の配給を、農林統
計を基準にしてやることになったから、地元から「それ
はダメだ」という声がフーッと出てきた。それでも、現
に相当無理して属地主義でやってしまったわけです。こ
の和田村の場合を、統計上はゆずがですから、米に
は肥料を出すけれども、ほかのものには出さないんなん
ていう行政も、戦争中やっていたんで、だから、米を本
当に自分がつくっているんだけれども、肥料が来ないとい
うことになってしまった。そんなことで、属人主義で
なまやダメということが、だんだん出てきたわけです。

だから、おのずと農家人に農業労働力が問題になっ
てきて、そのためには、どこまでが農業かとかいろいろ
決めなきゃならなくなった。農業労働にしても、どこま
でが農業労働か。近藤先生が、専業は注ぎ込む労働の
量で決めるんだと決められた。決めたはいいけれども、
農業に注ぎ込んでいる労働か、その他に注ぎ込んでいる
労働か、わからないじゃないか。それはどうしたうわか
るんだ。そうすると、近藤先生はああいうふうに定義さ
れたけれども、実際そんなことで専業は分けられるん
だろうかという話に、だんだんなってきた。所得の大、
小か何かで思い切って分けちゃうというのを、この人間
は働いて主として農業所得を上げているんだから、これ
は農業労働に従事しているのだというのを決められる
けれども、注ぎ込む労働の量の大、小で決めるのはむず
かしい。

けれども、注ぎ込む労働の量で専業の分類を行なう

考の方は農林統計の初めからあった。そのころは、農家というもののしか問題にしないでやっていたから、なるほどそれでよかった。農家の世帯員を調べるようになる人について専業業を労働の量で決めるというのだから、それをどうやったらいいかということになった。

そういうことで、農家人口調査は大変に苦勞したわけだ。豊田 農家人口調査のときは、そういった調査項目や定義は、ほとんど久我さんが決められたんでしょう。

久我 そう。調査をやっている最中に、地方がまた意地悪なんだ、こういう場合は農業か、これでも農業かなんて質問が来る。それを一々経営不可分一体の原理から見ても、これは農業だとかいわずにやらない。それを無理して決めて、どうやら乗り切ったんです。だから、あれは統計の作報問題が出てくる前の唯一の調査です。そのうちに、長畑さんが亡くなったんです。

豊田 長畑さんは、いつ亡くされたんですか。

久我 21年の1月の終りが2月、そのころじゃなかったですか。それで大変に衝撃を受けたわけですね。長畑さんは、戦後ぼくが帰ってきたときに、「民主主義の時代になって、統計が復興すべき時代がようやくやって来た。お互いに努力しましょう。その点で、食糧方に米の統計を取られたことは、統計全体がダメになった基本的な問題だ。取っていったのは軍閥思想だ」としめじみいわれた。軍閥主義的思想に立てば、あのようになったことは、当然だった。しかし、長畑さんは食糧方と統計とじゃ力があるより違うんだが、「何とかこれを統計の方に取り戻すことも、この機会に全力を上げてやろうや」といって取られた。

そのときに、大沢さんという若い課長が統計課に来られたわけだ。彼は食糧方で、イモのつるを配給することになったときに、それを主食配給の数字の中に含めることを、GHQがいおうが何だろうがダメだと、頑として聞かなかった。配給することはいいい。けれども、人間は家畜じゃないんだ。イモのつるを主食配給量に入れて、二合三合のうちに入れて計算するなんて、そんなバカなことはできないと彼はがんばった。あんなの食糧方に置いておくのとGHQのだからに追われて、統計課長に来たんです。統計にはそういう人が来たりしたものです。けれども、長畑さんとぼくは大喜びだった。それまでは統計課長というと、農林省の中のくずばかりよこしてきただ。それが、若い本当にびろびろした課長が来てくれるというので喜んだ。大沢さんも、食糧方から追っ払われたような感じがこうですかう、「よし、統計の復興のためにオレは一緒にやるよ」といった。そうしたら、長畑さんがぽつくりとなくなった。

そこで、これは何とかせにやろうかなと考えているときに、未の問題について、さんざんいろいろいわれたものですから――。

豊田 食糧危機に関連した問題ですね。

久我 ある意味では、はなはだ不遜な話だけれども、何としても20年産米3900万石をなんて数字をぽつておくわけにいかないの、大沢さんに話をして、20年産米がどれだけあるか推算してみようというて、推算をやったんです。それをGHQが聞きつけて、持ってこいということになって、それがガサガサするもとなつたね。

20年産米の推算の数字を持っていくことになって、そ

のときの農林次官の河合良成さんと、GHQと一緒に行く車の中で大げんかをした。「おまえは首だ。食糧輸入をアメリカにゆれゆれが一生果敢交渉しているのに、3900万石がうそだなんて、何をいつているんだ」といわれた。あ時は、米の生産高は食糧庁がやっているんでしよう。だから、GHQと食糧庁の方で交渉してこうというのに、統計のほうは、あれは間違っているというのだから怒るのも無理はない。

豊田 食糧輸入の要請は、最大の問題でしたね。

久我 それを妨害するのかという。相手が幾ら次官でもこっちは、GHQがついているから気が強い。虎の威を借るヤツで、「あなたオがそんなことをいつているから食糧輸入が決めてもらえないじゃないか。向こうが信用しないんだから」しかし、統計は調査をやった結果出た数字だから、それを使うしかしようがないじゃないか。「そんな資料はダメです。幾ら調査してそう出ても、真実がそうであるかどうかということと、吟味をしないで出してもダメですよ」と、けんかしながらGHQへ行ったことがあるんです。3回行きました。「貴様みたいのとは、もう口を更かぬ」なんていつて、怒るのも無理ないけれども、やっているうちに、GHQに大差に信用されて、食糧輸入の必要量を計算しろとか、だんだんそういうことに引、張り込まれて、処置をせよとした。しかし相手は鉄砲持っているんだから、「やりません」なんていつわけにいかない。(笑)

豊田 絶対権力ですかうね。

久我 食糧庁がいやがったりしたけれども、それをしていて、だんだん統計機構問題に踏み込んでいつたわけ

です。

豊田 機構問題のところから、次回に伺いましょう。

どうもありがとうございました。

豊田 この間は、戦後の農林統計の再建の話に入って、連合軍司令部から米の統計について呼び出されて、意見を問われたという功談のところで終わりました。それから結局、大きな組織をつくられることになっていくんですけど、その経過、司令部の態度、農林省の態度などについて……。

久我 とにかくあのときの米の統計は、390万石ということだった。ところが、当時の日本の統計思想は、ドイツのいわゆる大数統計の思想がそのまま入っていたから統計というのは漏れなく調査をして、積み重ねていったものに、手を加えてはならない。人間の恣意で勝手に数字をいじるのを調査する意義がない、そういう意識が、一般的に非常に強くあったわけですね。だから、390万石になっても、それは仕方がないじゃないかという意識が一般でした。

それで450万トンの食糧輸入の懇請をしたわけですね。しかしGHQははなも引、かけないありさまなんです。390万石なんていうことがあるかというわけだ。

そういう事態だったから、私は確かに統計数字はそういうことになったけれども、どうもこのまま真実だといえないだろう。390万石はどう見ても内輸ということで、いろいろと過去の数字をいじったりして、乱暴な推算をやったんです。それで510万石は下るまいだろうと、これはただ農林省の内輸の見当としてだけやっていた推算の数字なんです。それがどこからか知らないが、GHQに漏れたんだ。ぼくが呼ばれて、レーナードに統

計が何かしいじやないかといろいろやうれて、あれは統計でやっているんじゃない。食糧の供出の結果でやっているんだとか、いろいろ話をした。それにしても、当時長畑さんが亡くなったから、農林省でスタティスティシャンというのはごくノ人しかいなかった。その農林省の唯一のスタティスティシャンとして、この統計をふまえはいいといえるかと問い詰められまして、それは何かしいと思うかう推算はしてあるという話をしたわけです。

それならその数字を出せということで、5100万石という数字を、こういう計算でこういうふうに出しましたという説明をした。面積を面積でこんなに減るはずはないとか、前回もいったように、府県かうの報告はやたらに減っているんで、戦争中にも直したりしたぐらいですかう、そういうことを上に出したり、ちょうどその頃、軍が農地をどれだけつぶして軍需工場にしたかという統計が、軍需省にあったので、それは府県別にはなっていないかっただけけれども、そういうものをもとにしたリして日本の稲作面積がそんなに減っているわけではないという考え方で水稲作付面積を推算した。

反収は、トレンドを引いてみて、まだ生産力が落ちてくるといふところまではいかないだろうということで、パラボラの式を当てはめまして、過去の数字からトレンドを出した。それに、100年に1回起こるであろう凶作のラインを引いた。昭和20年は凶作でしたかう、100年に1回しかない凶作であると仮定して、最低の線をとって反収を決めたわけです。それで両者掛け合わせて5100万石、これ以下ではないだろうとやった。

ちょうどそのときに、942のアメリカの中国系統の

又世の、グビッド・何とか・リーという人が推算したのが、ぼくよりも40万石少ないぐらいの数字だった。5060万石じうい。両者の数字が非常に似てゐるでしょう。それでレーナードが大変喜んだんですが、その結果でしうか輸入のことは天然資源局でなしに、経済局がやっておりますか、こんどは経済局の有名をマーカット局長に呼び出された。

豊田 直接ですか。

又我 それで行ったところが、マーカットがあまりはこういう数字を出している、これはオレも正しいと思う、94年の推計もこうなっている、だから日本人が飢え死にしない最低必要輸入量を計算してこいというんだ。これには弱りました。ぼくは統計家だから、統計調査はやつても、輸入のことなどやる職務にないとまんざんいったけれども、マーカットはききいれてくれない。その頃は、とにかくまだ94年には銃を持って、看剣した兵隊がいるわけだから、ことわるわけにはいかず、それじゃ一応ぼくも推算をしてみる、正式なものには農林省に要求しているんだらうから、ぼくの個人的な推算としてどの程度にふるか、いっぺん計算してみようということになった。

当時、官房に渉外課というのがありまして、輸入の総請の数字を、食糧庁の資料に基づいてつくっていた。そこに、昔かう親しい井上晴丸さんがいたんだ。それで、ぼくは井上さんに、こういうことになつちやつたと相談したんです。だから、私的なものとはいうけれども、美態は井上さんだとか、その当時、今井さんだとか、いろいろ農学士の昔の友達に応援してもらういました。

それは農林省の食糧輸入の総請をやっていた人たちだから、そういう人たちの知恵をかりて、500万石をもとにして計算して、これほほくのほんの推計にすぎないよということで、マーカットに持っていたわけですよ。最低の輸入必要量がたしか150万トンくらいじゃなかったかと思います。それを持っていったところが、マーカットは非常に喜んで、GHQの推算とほとんど同じであるというので、アメリカ本国へすぐ知らせたらしい。1週間もたたないで、日本政府の150万トンの食糧輸入をオーケーしてました。その前にアメリカの本国は、日本の数字がそんな数字では問題になうぬとっていたんですが、マツカーサーがれいの有名人をせりか、「食糧を送るか軍隊を送るかどっちをとるか」と本国にせまったわけですよ。食糧を送るにしても、その数字がはまりしないじゃないかと、アメリカ側でやっていたところだったから、総請して1週間たたずに「おまえの出した数字でオーケーが来たぞ」とマーカットが知らせてくれた。そのときのことを考えてみますと日本側は統計は動かせない、その統計で出てきた数字だから、これだけもうわにや困るということと、固執していたわけでしょう。ところが向こうはそんなことはとんちやくしない。おかしいものはおかしいんだ。500万石ならよろしいということで、150万トンの食糧輸入がオーケーになった。日本は450トン要求したって、どうせ向こうで査定されるであろうという考え方でしよう。だから、向こうと考え方が違うんです。150万トンの輸入が決まったときに、河合良成さんは大変喜んでくれた。150万トン来るんだという、われわれが最初この程度は欲しいと考えたぐ

ういは十分ある」といって、初めて統計を修正したこと
の意義を理解してくれたんです。日本でこういうことを
やっていたんじゃ困るというのか、アメリカの強い意向
だったわけです。

そこで、日本の統計の、特に農林統計の内容をよくす
るために、どうしたらいいかということ。アメリカ自
体は、アメリカの農業統計の制度を日本に入れて、ある
意味では、アメリカの考え方は農業生産高を推計する
ということでしょう。そういう思想を入れにやいかぬとい
うことだったんでしょうね。

豊田 アメリカは、クロップ・エスティメートが伝統的で
すから。

久我 それを日本に持ち込まなきゃ、これはどうにもな
らぬということだったんでしょう。われわれは残る責任
を負えといわれても、米の調査は食糧庁でやっていて、
統計数値に責任を負い切れなかった。しかも、食糧庁で
はうそをいっていたんだ。業務報告だというけれども、
実はそうじゃないわけです。統計から取り上げて、戦争
中も彼らは坪刈りなんかをやっていたのであって、業務
報告なんかで統計をつくっていたんじゃないんです。統
計調査をやっているんですから、統計として責任を負う
ためには、どうしても統計機関を再建していかなきゃ
ダメだ。すべて統計がダメになっているんですから、農林
統計としては、米の統計が確立しないで全体が確立する
はずはないんだから、どうしてもこれは統計でやうにや
らうねと考えたわけです。そこで、統計制度の改革につ
いてどういうふうにするかというので、アメリカはリード
博士をよこしたわけです。

豊田 いまのお話のマーカットに呼ばれて数学を出され
たときが、21年の春ですか。

久我 そうです。

豊田 リードが、21年の5月に来てありますね。

久我 リードさんと、日本の統計についてそういった話

をだいたいいろいろしました。ところが、アメリカ人は、

やっぱりなかなか偉いところがあります。われわれがい

ったのを、うのみにしななんだ。「わかった。しかし、

日本には日本の歴史のあることだ。食糧事務所がやるこ

とになったのは、やっぱり市町村に任しておかないで、

国の機関がやるということになったんだろう。その実

は、1つ重要な意味を持っていると思う。だから、これ

から統計改定について、オレは現地下意見も聞き、実態

も調べたいから、おまえもついてこい」。こういうわけで

ぼくと、食糧庁からそのとき調査課の、後に調査課長を

やう水た松岡さんが出てリードに同行しました。彼は、

「統計課の方で来の統計を確立したいという気持ちはおわ

かるけれども、いまは特に日本の統計制度改定のための

研究をするんだから、おまえも統計課のことを固執しち

やダメだ。松岡さんも、食糧庁という立場を固執しちや

ダメだ。とにかくオレがいろいろ研究して、意見を出す

のに協力するということ意味についてこい」といって、歩き

回りました。

全国あっちこっち調査して歩きながら、議論をした。

帰ってきた後で、リードさんは、「要するに食糧行政、供

出の割り当てをする人間が、調査をするのはダメだ。レ

スボンスが全然違う。統計調査の担当者も来がどれだけ

あるかと正確に出そうとするが、片方食糧行政の方では

供出を円滑にやろうとする。それが義務だ。その義務を果たすためには、生産高の数字はやたらに大きくない方がいいに決まっている。府県に対しては大きくない方がいいというけれども、食糧庁としては供出が円滑にいくような数字であってほしいので、絶対量がもっとあるなんて出すことを食糧庁に要求するのは無理だ。だから、統計はどうしてもアメリカのように、独立した機関にする必要があるんだ」といって、リードも、私らの統計の主張に賛成してくれたわけです。

そして、統計調査を改革していくもっと詳しいプランを考えて、出してこいというので、われわれもいろいろな案を出してみました。ところが、GHQの方では、悠長に議論しているわけにはいかぬ。来年の麦の数字も、米の数字も出さなきゃならぬんだかうということと、リードと向こうのウィリアムソンという次長が、当時の榎見次官を呼んで、統計改正の4原則を出したわけです。それをもとにして、統計制度改正案を至急にこくってGHQに出せというディレクティブが出た。それでわれわれはリードと一緒にやっておりましたから、改正要綱というものをつくろうということと、こしうえて出したわけです。

豊田 4原則が日本側に示されたのが8月10日で、作物報告組織整備要綱が9月30日に提出されていますね。非常に早い。

久我 それは前からやっておったから、できたわけです。豊田 4原則で独立の組織をつくるという方向が決まったわけですね。

久我 それをつくらるとき、統計課の内部でどういうふう



にした方がいいか、3つ意見があつたわけです。やっぱり今後の民主主義の発展のためには、府県を無視してやろうといつてもそれはダメだという主張と、いや、徹底した官治組織をつくれというのと、それからクロッポのことはアメリカのクロッポレポーティングのようにするけれども、統計といつたって、特に農業センサスのようにごく小地域のいろんな農業の問題を理解するために必要な数字を出さなければならぬから、単なるエスティメートとして広範囲の数値だけ求めればいいというものじゃない統計もある、だから、両機関とも生きるようにせにやいかぬという主張と、端的にいえばこの3つあつたわけだ。

府県を尊重せにやいかぬという主張をいつたのが、鈴木さんです。

豊田 鈴木さんは、県の経験があつたから。

久我 これは、ある意味では非常に正しい、筋の通つた意見です。一応は非常に極端に、この際、全部国の機関にしちやおうという意見でこれも山田典男君だつた。ほくの一審又工的なんで、中間的の案だつたんです。それでさんざん議論しましたけれども、結局は大沢さんもほくの意見で行こうしやないか。中間案ですから、一応それで行こうということになつたんですがそれを中でさまじい議論をしたものです。それで一応ほくが中心でその案をつくるようになつた。それで案をGHQに持っていつたわけです。

豊田 その案とあつしやるのが、「作物報告組織整備要綱」ですね。

久我 その整備要綱について、リードがほかのところは

よろしいけれども、ひとつだけ納得できないというわけだ。それはどういうところかというところ調査結果の数値を補正するためのいろいろの資料を求めるには試験研究機関と結びついてやっていくという事だった。作物報告組を新しくつくったにしても、はじめはまだ力がないですから、食糧行政と結びつくことはいけないうたろうが、試験研究機関とは手を結んでやった方がよろしい。たとえば被害の尺度を作るなどいろんな事案について、試験場との連携でやった方がよいという意見をほくはGHQに持ち込んだわけです。

ところが、そんなことをやると、統計の範囲を逸脱してしまうということ。リードさんはその事について非常に強く反対したんです。それは、また職員の数の問題に結びついたわけです。試験研究的なことまで、統計の方で一部分やることにすると、作況調査とか何とかいうことになるでしょう。人員が非常に大きくなる。それはダメだ。統計家とそんなに大ぜい養成できるはずはない。だから、もっと機構を小さく考えにやダメということ。リードさんの考えたのは、大体1町村に1人という案です。あのころ町村が1万1000あったんです。当時5ヶ町村に1カ所ずつ試験圃場を持つということと農産課でいっていたから、その範囲と同時に統計の機関を置こうということにしますと、それは都より少し小さい地域で、その範囲でアメリカ的なクロップのエスティメートをするには、1人の専門家がいたらよろしいという意見だったわけです。5ヶ町村に1人ということになると、明らかにえらく少ない人数になるわけです。

そうすると、そのとき本省にも統計家は非常に少なか

ったから、相当人をおやさにならぬ。頭でっかちの機構に
なる。そういうことで、リードさんと人員のところ
でどうしても意見が合いません。結局リードさんは、
たしかイーチ・ブランチに1人の割りで計算して、5カ所
村にその人を置いてもいいけれども、それ以上は置いて
はダメだという意見で来たわけです。

豊田 その実は、後で「戦後農村統計史」を編さんした
とき、私も資料に当たってみました。原文によると、
each branchに no more than one personとい
うふうに表現されているんですね。日本側はその「no」
の解釈をゆがめて「1人より多くてはいけない」と書いて
あるのを、「1人以上でなくてはいい」と訳したん
ですね。「no」というのをどっちにかけるかで、意味が
全然逆になっちゃう。

久我 それは、ぼくが訳した。大沢さんと相談して、「こ
れは困るから、ぼくはこう誤訳する」といったら、大沢
さんは「よからう」というわけですよ。そしてさらに「one」
を「five」に誤訳した。しかも、リードの出してきた文
書はリコメンデーションなんです。

豊田 私の調べたところでは、文書全体については、サ
ジェスションという名前で整備要綱に批判を加えた上で
文書の中心のところはリコメンデーションという題目に
なっているんですね。リードのサジェスションを読んで
みますと、やはり予算と人員について非常に気にして、
大き過ぎるというながう、しかしながう、日本の事情は
―――」というように、人員の問題について非常に
悩んでいるんですね。相当久我さんや大沢さんが働きか
けたんだらうという感じがしますね。

久我 結局こっちはとうとうリードの意見をききまいれな
いで、大沢さんに承知してもらって、ぼくがわざわざ誤
訳として、大蔵省へ持ち込んだ。

豊田 大蔵省が文句いいませんでしたか。

久我 大蔵省は驚いた。5人置かなきゃならぬといっ
た。5万5000人になっちゃう。そんなに置くといっ
た。人がいらないか。大蔵省が予算をみてびっ
くりしちゃっていた。だから「それはいいんだ。そうい
っているけれども、実は向こうが本当にいっているのを
オレがこう誤訳したんだ。責任を持つから、そんな教で
なくていいんだよ」と。大蔵省の武藤主計官と交渉して
「それじゃ、この程度でどうだろうか」といったような
ことで、人員八千何百人が決まったんです。

それはリードさんが、もうじき帰国するという時期だ
った。予算で決まった800人という数字を、ぼくは容易
にリードさんにいえないわけだ。彼はあまり多過ぎては
いかぬという意見を出した。それをあっちこっちに何遍
も誤訳を重ねながら、とうとう800にしたんです。その
後に行政整理で、統計が多過ぎるということ非常に苦
勞するもとは、実は1つばかりこういうところにあるんです。

豊田 しかし、それであの時期にあれだけの規模の作物
の実測調査ができたということもいえ半すね。ああいう
緊急の場合の調査は、ある意味の人海戦術でできたと思
うんです。

久我 だから、ある意味では、やっぱり戦後処理のため
にやむを得ずやったことなんです。そうして統計数値を
何とか直そうとしてやったわけですが、農林省の中でも
9月16日からリードの文書が出て、統計は新しい機構をつ

くろんだ、米の統計を食糧かう移すんだとなったときに食糧方が猛反対。

榎見次官の前で、農林省いゆう大ぜい集まっている前で、食糧方はそのときの片柳長官を先頭にして、みんな絶対反対というわけです。「いまこの状況の苦しいときにそんな大転換ができるかというわけです」。それに対してGHQの意見というのは、とにかく統計と供出とではレスポンスが違うじゃないか。食糧を円滑に収集し、消費者に配るのが、食糧方の基本的な職務だ。その職務についている人間に、統計数値を、実態はこれだけあるんですよ、自分で出すことを要求することは残酷だ。そんなことはできないことだ、だからアメリカでも行政と統計とは別々になっているんだ。この実は絶対にまげるわけにいかない。そういう意見だった。それで、榎見次官も米の統計は統計課に渡せと、とうとう断を下したわけです。

そのとき、次官室は糖業会館の3階か4階にあった。会議が終わって出てきたとき、統計課は大沢さんと、ほくと、もう1人だれかがいた。食糧方の方は偉い人が大ぜいうろろしていた。エレベータで片柳さんなんかと一緒になって、片柳さんが悔やしかって、「とうとうおまえに負けた」と怒りながらいわれたことがあるんです。いっか片柳さんとそれを話して、大笑いしたことがあるけれども、そういうことで、農林省の中では非常に反対があった。

もう1つ、地方の統計機構の問題がありました。何と云って戦前から、人口センサスをやっていた統計局の統計と、農林省の農業統計が、日本の統計の中心で、

ほかの統計はみんなそれにばう下がって、地方の統計機構が存りたつてあったような状態でしたから。

豊田 県の統計課、市町村の統計係がそうでしたね。

久我 その農林省が、県と市町村とは別の統計機関をつくるというんだから、ほかの統計は成り立たなく存っちゃうんじゃないかということ。猛然た反対が起こったのは当然なんです。そしてその中心に存って、日本の統計制度全体を改革しようということをやっていたのが、統計基準局でしょう。

豊田 当時は統計委員会です。ライス視察団が来て、統計調査組織を再編するということで、吉田内閣が例の学者グループを起用して、統計の改革をやろうという話になった。

久我 ライスさんが来たけれども、とまずでに、日本の農業統計は、別の機構をつくってこうやれということ。5月頃から4原則として出され、それをもとにして、農林省も政府も作報組織をつくること決めた後だったんです。そこで、供出があったりすると更にはやむを得ないって、農業統計については、ライスさんは公的の勸告ではあまり触れなかった。

ただ、厚生統計、医療者さんの統計については、ライスさんは統計局に統合させようと言んざん主張した。ところが医療者さんの方は、ある意味では、病院や何かの業務報告がもとで、どういう病気がどうあるという統計を、厚生省がつくっていろわけでしょう。だから、そういう統計は統計調査の機構を別にして府県でやるなんてダメだというわけで、厚生省がライスさんの案をけつとばしたわけですね。つまり農林省と厚生省がけつとばしたか

っこうになった。それでライスさんが怒って、厚生統計
 については、だいぶ厳しくいったんです。
 豊田 そのころでしたか、人口動態が統計局から厚生省
 へ全部移っちゃっていたんですね。統計局としては、官
 庁縄張り的事実をことという、仕事の大きいのが、一
 つ移ってしまった感じがしたでしょうけれども、厚生省とし
 ては、ある意味で当然の主張だったかもしれません。
 久我 たつて、それは死亡、出生の統計だから、厚生行
 政の基本だから、厚生行政の基本だから、厚生省でやる
 のはあたりまえだということに移ったわけですね。
 ほかのものだってそうです。たとえば食糧の業務報告か
 ら実際に出てくる統計、供出は幾ら集まったかなんて統
 計は、統計調査機関が調査することはないんですから、
 食糧庁が担当するのは当然のことだけれども、それを戦
 前、県の統計機関を通じてやっていたものだから、統計
 局と厚生省については、統計再編のさいにこったわけ
 ですね。
 しかし農業統計の方は、ある意味ではいまいった問題
 とは異質です。本当の統計調査をやろうというんです
 から、ただフロップエスティメートをする機関として、
 作報を独立してつくろうということです。それじゃ、地
 方統計機構がつぶれちゃうじゃないかという長々ついて
 は、ほくのいった中間案は、いや、県の統計機構もつぶ
 さないんだ、たとえば農業基本統計、そういうものは県
 でやるんだ。それが正しいと思うということで、一応の
 妥協をして、しかも、作物統計以外のものはみんな県で
 やるというかつこうで始まったわけですね。それで作物統
 計だけは別につくるということで、県との間で、統計基

準局も加わって話し合いましたけれども、県から大塚に
たたかれたわけですね。けれども、どうしても作物統計は
独立せにやならぬということで、そのころにはもう近藤
先生が局長であられて、あくまでもその線で行くという
ことでした。

そこへ、ちょうどアメリカの農業統計の大家であるサ
ールさんが来た。サールさんは、アメリカの農業統計の
中で、単なるクロックフェイスメートだけでない、ア
メリカの農場の問題だとか、農業経営の問題だとか、そ
ういうこともアメリカの統計機関としてやるべきという
思想を持っていて、いろいろアメリカでやり出しておっ
た。特殊統計課というのが農務省の中にあつて、その
課長をやっておった。そういう人ですから、日本へ来て
も彼の意見を主張して、センサスといえども、サンプル
センサスにして、国の機関がやった方がよろしいという
意見だった。そうすると、センサスまで県を使わなくな
った、県の統計機関はどうなるんだということ、大
騒ぎだったわけですね。

そういうことがあつて、ちょうどサールさんが勧告し
たときには、たしか24年ごろだったと思うけれども、農
地調査をやるということだった。農地調査というのは、
また全く特殊な調査だったんです。

豊田 たしか23年から24年ぐらいにかけて、行われたん
じゃなかったかと思います。

久我 そのころですよ。冬期調査、夏期調査というのが
戦前からやっておったでしょう。それを二度センサスを
やるのは、大塚だから、1回にしようということ、考え
ているところへ、GHQにまた呼び出されて、セン

サス的な調査をやるというていっているけれども、ことしはやめろといわれた。そういわれたって困るなと思って、それほどいうことかと聞いたら、実は極東管理委員会とかいうのがあって、日本の問題を討議しているが、そこで、日本の農地解放はインケキであるという疑問がぶちやっただというんだ。それで今後はそんなことはないという説明しなければならぬ。農地解放については、有名なアメリカの昔のラデジンスキーが来て指導していた。その先生なんか、青くなっちゃった。

この問題はどこがいいたかということ、極東管理委員会は、英国と、アメリカと、ソ連と、中国で構成されていたわけですが、そこでソ連がい出して、中国も英国も同調して、アメリカは非常に困っちゃったらしい。そこで日本政府の行政から独立した統計機関に農地解放の結果を調査せしめようという約束をしたというわけだ。だから、ことしは農地調査をやれということになった。

それで、ぼくが今後は呼び出されたとき、ラデジンスキーさんもその場について、ぼくに、調査をやるのはいいけれども、これは国際問題になっちゃうから、農地解放がインケキだなんて結果を出したら、承知しないぞというわけだ。実際、農地解放というのは相当嚴重にやっていたから、「解放がインケキだなんて結果出さないから、心配ないよ」というていたんですが、さて、サルさんが農地調査をサンプルセンサスでやれとい出した。しかし農地解放の結果をサンプルセンサスでやって、どれだけの誤差がどうあるかなんてできない相談ですよ。

そこで困りまして、悉皆調査とサンプルセンサスを合

わせてやるという案を苦勞して作った。つまりサールさんのいうような農地利用に関する諸問題はサンプルセンサスで調査して、農地解放の結果がどうであるかという調査は、悉皆調査でやったんです。

調査の結果は、原局が発表した解放実績の数字とそう大した差はなかったかう、順調に解放は行われたんだという結果になって、ラデジンスキーさん喜んでやって、場所を忘れたけれども、日本料理屋にぼくは呼ばれて、ごろそうになったことがある、よく努力したとかいって、けれども、それは何も彼に頼まれてやったじゃないんで、やった結果がそうなんです。

われわれは行政の手段として調査をやることはいろいろ考えていたけれども、行政の効果測定をするというための調査をやるということとを、考えたことがなかったでしょう。だから、それには大変むづくりした。けれども一応そういうことで、めったに起こることじゃないけれども、農地調査というのは1つの特殊な意味を持っていた。それはそれとして、農地調査では作報組織で、サンプルセンサスをやるという方式が入ってきた。そこで統計基準局の方は、農林省がセンサスまでサンプルセンサスでやったかう、だんだん鼻から足を洗うんだらうと、そのことが問題で、とうとう統計基準局と農林省とぶつかって、近藤先生と大沢さんが統計委員会の委員を辞職するという辞表をたたきつけて、その場を去られたことがあったわけです。

豊田 統計委員会が基準局に改組になるときの、統計法の改正のときでしたね。

久我 統計委員会は、統計法に基づいて調査の企画にも

口をふせうとしていたわけだ。資源調査法を改正したもののだから、それに基づいて農地調査をやろうとしたんだけれども、統計委員会はそのような県を便りにやいかぬとかあんまりいうものだから、けんかに石っちやった。それでほくはサル知恵を出して、作報組織は食糧かうこっちに移って、機構ができたんだから、食糧管理法に基づいて米の調査をやることにしようじゃないかといひ出した。大沢さんは、そんなことをいったら、あとまた食糧庁との問題が出て困るんじゃないかという話もあったけれども、統計委員会がとやかくいうんその統計法を使わないぞというためにそういうことをいったわけですよ。実際にそれで作物調査は、しばらくの間は食糧管理法に基づいてやることになったんです。

豊田 それで、作物統計は指定統計になるのが遅かったんですね。

久我 だから、統計基準局は歯が立たないわけですよ。幾らくやしがって、作物統計については、統計基準局に報告はしてもいいけれども、相談は持ちかけない、何も統計法に基づくんじゃないんだかうということになったわけだ。数年たって、統計基準局としてもそれは困るから、農林省の要綱をそっくり認めるから、統計法でやるようにしてくれということになって、統計法に戻ったんです。

豊田 統計委員会との衝突は確か23年でしたね。そのときに、同時に統計法改正の問題が出ていて、そこでぶつかっちゃたんですね。統計委員会の行政事務の中に「統計機関の機構、定員、及び運営に関する-----企画-----をを行う」という「企画」という文字を統計委員会の事務局

が、閣議決定の後、ちよこちよこつと挿入してしまった。それで、農林省が猛然と怒って、その問題で近藤先生が委員会を退席されるという事態が起こった。その背景が、いまおっしゃったような作物統計のことなんです。久我 とにかくそれで、統計法によらないということにしましたかう。

豊田 その後、作物統計は、統計法によって指定統計になったでしょう。

久我 1通あったかどうか覚えてないけれども、あったかもしれない。とにかく離れちゃったわけです。だから統計基準局としてはどうしようもない。食糧管理法という、何かの法律でやるというんだかう、その機構問題を人か、何にも発言権がない。それで統計基準局としては結局、実際いえば近藤先生の追い出し運動みたいなことをやったりしたんです。

しかし果を無視してしまうことはダメだという意見は、鈴木総士さんとぼくでその実は同じ意見でしたかう、悉皆調査をやるときは、やっぱり町村を無視して部落範囲の調査をやるといことは考えられない。農業センサスだけはあくまでも残そうということを考えてあったもので、サンプルセンサスもいいけれども、悉皆調査も残すんだということにした。だから、ぼくだけは退席しないで残って、そういうことにするんだかういいじやないかということ。で、統計基準局を抑えたりしたわけなんです。実際、そういうふうにしてやってきたわけなんです。

だから、そういうことで作販組織はクロープだけを調査する、特に米、麦の統計調査をするということであつたけれども、そのうちイモの調査もやる、甘藷の方か

う命令されて、ナタネも調査するというように範囲を拡
げていった。一番厄介だったのは牛乳でしたよ。占領軍
が、本国から来るばかりじゃ牛乳が足りないというわけ
で、日本の牛乳を使おうということになった。日本の牛
乳を使ってみたら、脂肪量が全く低い。だから、脂肪量
のわかる統計調査をやれというんだ。困ってしまって、
そんなことできるか。といったんだけど、とにかく
一時、牛乳の脂肪量をほかの調査もやりました。

豊田 そのころ隣の畜産班が担当でその調査をやってい
ましたので、私も覚えています。

久我 これは、GHQがそういうことをいい出してやり
ました。そうすると、だんだんそういうことも統計事務
所でやることになってきたでしょう。だから、統計基準
局は、作物だけじゃないじゃないかと思うのも無理ない
んです。そのきっかけを非常に強くつくったのは、水産
の調査なんです。ぼくは水産の統計調査をやっていたし
たけれども、GHQの上の方から、漁業改革をやれとい
うわけだ。そのために、漁業権を調べろということにな
ってきた。あの漁業権調査という猛烈な調査をやったん
です。

豊田 23年でしたか、秋山君とか元気ののがいまして。

久我 こんなのは、予算も何もないんです。それをやれ
というんでしょう。しょうがないので、大蔵省に話して
残りの部分は中で苦労して流用してつくるから、15万円
だけ予算を認めろといったわけですよ。だから漁業権調査
というのは予算15万円ということになっている。実際は
もつと大変かかったでしょうけれども。それでも、日本
の戦後の漁業権解放をこれに基づいてやったんだから、

そういう意味では、非常に重要な意義を持った調査であつたわけだ。

そういうことが出てきておるものですかう、結局、農林水産業生産の調査のためには、センサスは別として、全部の調査を作物組織に持ってこなければダメだということになつた。ところが、クロップ・レポーティングというのを、最初、作物報告事務所と誤したわけでしょう。これも、実にバカを誤ですな。

豊田 直訳ですな。

久我 アメリカでクロップ・レポーティングといへば、農場生産物の統計ということですね。だから、フィッシュ・クロップも入っている。そのことを要用しました。アメリカのは海面の漁業は内務省が管轄していて、統計も農務省じゃないんです。アメリカの農業の統計は農場主義だから、農場の中のポイントでとれるものは調査していますけれども、海のは調査していません。けれども、そこを要用しまして、クロップ・レポーティングというのは農場生産物ということだから、それを日本の場合はちよつと広げて水産まで入れちゃって、一切の農林水産物の生産物の統計はこの機関がやることにしよう。それはなぜそういうことをいふかというのと、アメリカかう牛乳の調査はこうだとか、漁業権はこうだとか、いろいろ出てくるということがあつたかうというのが、一つあります。

もう一つは、統計機関はちよつちゆう統計基準局とぶつかつたりしておりますかう、何か揺れておるわけですか。そこへ、行政整理の問題がいろいろ出てきた。アメリカのライス博士は、いま供主制度があるので農業統計は別機関で調査し仕方がよいよといつておられたわけですが、

統計基準局としてはそれが頭にあるから、供出制度が変わってきたら、統計基準局に申し出ない独立機関を置いておかなくてはいいはずだという意識がある。農林省はそれは困るから、生産物全体をやる統計機関だということにして、供出制度が揺るごうとも揺るがない機関に変えようということも考え出したわけです。

豊田 24~25年のことですね。

久我 それで、すべての農林水産業の生産高統計は、この統計機構でやることに決めて、それで順々に拓けていったわけです。

豊田 いろいろな農林業水産物の調査を次々に。漁獲高と初め養蚕、林業、牛乳……。

久我 そうやって、みんなだんだん拓けていったわけです。作物報告事務所という誤解間違いだったんだ。クロップレポーティングも作物調査だけに限るのは、ある意味で間違いなんです。

本当の意味は農場生産物でしょう。日本は農場主義ということは考えられなかったから、農林統計機構に作物報告組織という名称をつけたのは、ぼくのやった誤訳がもとをんだということを大いに主張しまして、農林統計機構を名前と変えて確立するということをやったわけです。当時、安田喜一郎部長だったから、ある意味で非常に官僚主義的な人だから、ぼくの提案を大いに歓迎して進めてくれたわけです。

豊田 25年5月ですね。統計調査事務所と名称を改めたのは。それから行政整理の問題と基準局との関係、国の機構と果の統計機構との関係などについて伺いたいと思います。

久我 行政整理というのは、つまり、こんなに農業の統計調査ばかりはびこったんじや困るということがわかった。統計基準局としては、まことにあつちをいわけた。統計委員会がやがて行政管理局の中へ入っていったでしょう。そうすると、それは行政整理を担当する役所ですわ。

豊田 行政監査するところですか。

久我 そこへ、統計基準局が一階に統合されたわけですから、今度は機構の問題はダメでも、行政整理をする権限は持っているんだぞといい出した。確かに行政管理局はそういう権限を持っているけれども、統計基準局が持っているわけじゃないかというところは主張したんだが中は一階ですから。それで吉田内閣の統計の行政整理案が、昭和24年か25年ごろに出てきたときに――。

豊田 最初は25年ですわ。それからまた26年にも。

久我 そのどちらだったか忘れちゃったけれども、前の方じゃなかったかな。新潟県知事をやられた塚田さんが行政管理局長官で、行政整理の問題が出てきた。時の内閣は吉田内閣でしょう。吉田さんは、左翼が非常にまういわけだ、統計機関は、かなり左じゃないかという意識があったわけですから。

豊田 けれども、マツカーサーにいわれたせいもあるでしょうが、戦後統計機関の整備について、吉田さんが総理として、統計の先輩の高野先生に相談され、戦前左翼として弾圧された大内さん以下の先生たちに統計のことをやうしたうということになったという経過があったわけですから。そんなことで、上の方もそうでしたけれども、私が統計調査局に入ったころ、中国などから帰ってきた

人や、戦前の左翼の理論家だった人が、統計の方にま
 れ込んでいましたね。農林省だけでなく、
 久我 それは新しく機構をつくるのに、全然できない人
 ではダメだったからですよ。民主的を思想を持っていて、
 調査をやろうというような人を入れようということとで、
 満鉄帰りの人だとか、みんな入れたわけです。だから、
 左翼的を機構に寄ったわけです。
 ところが、25年ごろになると、GHQも左翼を弾圧す
 るようなことになってきているし、とにかく吉田さんは
 極端に左がまらいますから、そういうことから行政機構
 を縮小整理していこうというから、まず統計機構を、統
 計機構なら農林統計機構もと来たわけです。それは無理
 はないんだ。和田博雄さんが農林大臣をやっていて、2
 ・1ストのときにそれでやめられて、吉田さんが総理で
 農林大臣を兼ねたことがある。そのときに、全農林が最
 初に吉田さんを赤旗を立てて迎えた。それで吉田さんが
 大腹怒って、「おまえはどこにいるんだ」と聞いたら、「統
 計だ」と答えたというので、統計というのは左がかって
 いていかぬと思うようになってたらしい。そういうことが
 あったから、行政整理ということが出たときに、農林統
 計の中に左が多いんだから、これを大いに整理しろと堀
 田さんにいったという話なんだ。これは正式に聞いたわ
 けではない。そういうことをいわれたんだぞということ
 がうわさで伝わってきた。
 それで堀田さんが、行政整理のいろいろな案を立てて
 出てくるのに対しては、こちらはまだに闘争ですよ。
 そのときに、統計基準局の美濃部さんはこの機会とばかり
 に、行政整理のほかのことには口を出さないけれども

農林統計の行政整理の案がオレがつくると、行政管理庁の中でいったというわけだ。塚田さんが、吉田にそういわれているから、美濃部さんがよけいなことをいい出したということにならなくて、むしろおまえ、やれということになった。それで、「よし、よし」というわけで、彼が案をつくった。

ところが、ゆれゆれは、これだけ減らしていくんだという美濃部案がわからぬわけです。500人を残して全部整理するという案をおしたりしていったらしい。それで、よし、これと闘ってやろうという気持ちになった。当時の次官が東畑四郎さんで「久我君、いかに戦争するか」といって、敵がどういうことでそういう案を立てたかがわからない以上は、戦争にならないうじやないか」といわれた。ぼくは、センサスほ府県を通じてやるという主張でやっていたから、ぼくだけは、必ずしも近藤先生や大沢さんのように統計基準局にまらわれていなかった。そういうこともあったから、統計基準局には、ぼくは年じゅう行っていた。1月の7日か何かに、いよいよ各省に対してこういう理由でこのように行政整理をするという案を内閣が示すことになった。当時ぼくは、予算の仕事をやりながら、何か相手のプランを手に入れる方法はないかとさんざん考えまして、石黒武重さんという元農林次官の息子さんが、読売新聞の記者をしていたんですが、その石黒記者に何とかその案を手に入れる方法はないかと相談をもちかけた。

一方相手の行政整理を担当している局長は、オレがやろうと思っていることに口出しするということで、美濃部さんと仲が悪いわけなんです。

しかし、美濃部さんの案を持っておちわけだ。石黒さんは内閣の記者だから、局長にそれを見せてくれといった。局長は「よし、よし、これは美濃部のつくった案だから」と他人の作った案だから石黒記者に見せたわけです。そして局長が手洗いに立ったすまに、その案をぼくのところに持ってきてくれた。そのときぼくは、美濃部さんが予算のことで席にいないので美濃部さんの机のところで待っていたんです。そこへ石黒記者が美濃部案を持ってきてくれたんで、それを大性で字し取ったわけです。それで敵の行政整理案の内容がわかったわけです。いやは盗んだわけです。美濃部案の字しを持って帰って東畑四郎さんに見せたら、「勝ったぞ、久我君」というわけで――。

豊田 そのときのことを覚えていますよ。予算の仁争と、ぼくらが夜遅くまでやっていたら、久我さんが行政整理案を盗んだという話が飛び込んできたのを覚えていますよ。(笑)

久我 それをもとに、こちらの対応をつくったわけですよ。いかにその案がでたらめであるかということと、行政整理案を塚田さんが出してまたときに、「こんな案で食糧供給の責任が負えろと大臣は思いですか」といって、東畑次官に大見得を切ってもらった。

豊田 統計理論に依拠して行政整理案に反撃したんですたね。

久我 それで塚田さんは困っちゃった。だって、「これはおかしいじゃないですか、農林統計をこれだけ減らせといっているけれども、実は果の統計機関」というものは、母けぬからダメといわれた、それに人を移せという、そ

ういう中味になっっているじゃありませんか。この行政整理案は一体大れがつくったんですか。」とやられたわけですね。それで塚田さんは、美濃部さんに「おまえ、そんなことやったのか」とかいい出して、内輪げんかになっちゃった。「行政整理の案をあんた素人にやらせたからこんなことになるんだ」というわけで、行政管理局の中は大騒ぎだった。

それはともかくとして、美濃部案じゃダメだから、実際のところどれだけ農林統計の人員を減らせるのか、おまえの方で案をつくれ」ということになった。それで案をつくらう。農林統計の人員削減率は、一般整理率より少なくなっちゃった。そういう案を、統計理論に基づいて作ったわけですね。塚田さんは弱っちゃって、冬その年に「暑い、暑い」と上着を脱いちゃって、しまいには「車畑君、助けてくれ」なんていい出した。そういうことで、結局、統計機構の行政整理の美濃部案なるものをつぶしたわけですね。

美濃部さんは自分の案がどこかう漏れたんだらうかと後で大変くやしがりされたそうですが皮肉にも、美濃部さんの机の上でぼくはそれを写したんだ。そして第1回目の農林統計の人員は540人を残して、あと整理してしまえという案に対しては、「大丈夫だ、こんな案には絶対負けっこない。」と思いましたがね。

豊田 反論できるということですね。

久我 そう、反論できました。その後、今度は塚田さんは、食糧庁の人員削減をわらって来たわけですね。食糧庁の方は人員削減に対して反論しようがないんです。

統計の方は一般整理率より少なくなっちゃっている。

それで東畑四郎さんがほくに、「食糧事務所の方の人員削減については(当時の)食糧庁長官の前谷君が困っている。おまえの方の人員削減率がこんなに少なくて、食糧庁にばかり人員削減がかぶさっても、オレは次官として困るから、もうちょっと工夫してくれ」といわれた。「工夫してみましよう」と答えて、亡くなった原君とほくとで、ちよこちよこつと工夫して、ここまで統計の方がさらに減らそう、そのかわり、食糧の方はこれ以上減らしたうダメだという案をつくったわけです。食糧庁から、そのときは大変感謝されました。東畑次官がそういう案で諒解した。それで安田さんが、統計はもっと減らさないでいいはずなのにこういうことをしちゃったと、大変怒った。けれども、農林次官の立場もあるし、理論的には統計の人員削減はもっと少ない線にいえるけれども、われわれも一般の整理率より少ないなんてことエヤっておくと、次のときにひどいですから、一般の整理率程度のことをまではやむを得ないというところで解決したわけです。

その次のときは、C V論で聞いたんです。やっぱり統計基準局長の美濃部さんが今度は大変勉強していて、機構を移すなんていうことはあまり考えなくて、もっぱら人間が多過ぎる、減らしていいわけだと主張しました。ところが、さっきいいましたように米の統計調査だけやっているわけじゃない。あれこれの統計調査を担当している人だということとで統計事務所の編成を凌えておいたでしよう。だから、こういうふうになっているんだ。

米の統計はおおたのいう様な人数を投じてはいないんじゃないか。そういうことで、今度はC V論をもとにして

議論した。

そのときに、CV論を基に議論して、負けるといけな
いかう津村さんと畑村さんを連れていくことにした。は
じめ二人は「そんな学問的にはおかしな議論ができるか
と」ってしぶっていったけれども、「あまえも農林省で飯を
食っているんじゃないか」といって、二人に一齣に行っ
てもらうたんです。それで、おかしなことを何こうがい
ったう、目くはせするかう、発言してくれ。そのほかは
原君とぼくとで論争するかうとこういうことで行ったわ
けです。

ところが、あもしろかったのは、すわる場所がそうは
ないわけでしょう。農林省が大ぜいなんだから、津村さ
んと畑村さんは、敵の陣営にすわっとる。それでいろい
ろ議論をやって、安田さんはムニャムニャいうけれども
内容はやわかっていない。何こうは河合さんや何か聞いた
そうすると、安田さんは大へん政治的で「あまえうう、
いまどこの問題と議論しているのか知っているのか。こ
の案は農林統計について美濃部が立てたものだ。農林省
が美濃部と議論しているんだ。あまえうは、あっちに引
っこめ」とどなりつけられたりして、後藤正夫さんなど
くやしがつたうけれども、議論の場から後方に引っ込
めさせられた。それで、美濃部さんをごやうごやうやっ
つけたわけです。

このときにもっぱうオレにはこの議論がわからないう
というんです。CVが、振れが少ないほどサンプルの数が
多くいうというのがわかる。大差振れが大きいか
う、大くさん調べたやをうぬというのをうめかるけれど
も、振れが少ないとサンプルの数がふえるというのはいや

かうないと彼はいうんです。そこで「考えてこうんをさ
 い。電車の線路の幅の統計はない。あれは振れは実に小
 さいものだ。けれども、あれを統計調査をやつて振れを
 正確に出すというんだ。たう、大変なサンプルが要るん
 だ。けれども、そういうことをやらないのは、電車がひ
 っくり返らないかう、要らないかうやらないんだ。だが
 米の使出をやるのに、農林省はそれに匹敵する程度の精
 度の米の統計がなきゃひっくり返さるんだという主張をし
 ているんだかう、たくさんのサンプルが要るんだ。面積
 の振れなんて小さいかう、それを正確に出さるんだかう。
 サンプルがたくさん要るんだ。それがC.V理論のいいと
 こうだ」と、ぼくは説明したんだ。そうしたら安田さん
 も、「わかった、そういうことでC.V論で行こう」というの
 か。」というわけで、それでやっただけです。

こんな調子の議論だったかう、本当をいえば、畑村さ
 んや津村さんに協力してくれといっても、学者としては
 困るわけですよ。ひっくり返さないんやう、そんな必要を
 いんです。それを、これだけは統計基準局が緩うそんな
 ことはないといつたつてダメだ。農林省がひっくり返さる
 だといつて、C.V論で押しまくって、また負けなかつた
 わけです。

もともと、客観的にいって、リードさんのいつたとお
 り、初めかう人が多過ぎた。そういう実は、否めな事実
 なんです。ただ、ぼくはいつかソ連の統計機構を調べ
 たことがあるけれども、これは大変な人員をかかえてい
 る。やっぱり、日本とは統計の持つ意味が違うかうでし
 よう、けれども、ソ連の統計機構は大変な人員をもつて
 いる。アメリカもクロックプレボーティングで、日本でや

つている情報サービスのことをやり出したでしょう。
 それを加えると、いまアメリカだつて相当な人員を使っ
 ていますよ。だから、仕事として、何をやるかというこ
 とで、その機構の人員が多過ぎるか、少な過ぎるとかい
 うことがいえるんだと思うんだ。そういうことで、いろ
 いろ仕事をふやしていく、統計の範囲をふやしていくと
 いうことをして、数を維持していくという方法をとるば
 るを得る。こういうことで進んできたのが、今日の農
 林統計機構であり、それゆえにそれはまた一つの悩みを
 持っているんじゃないでしょうか。

豊田 あのことろのことを思い出すと、やはり久我さんが
 中バにやつて頑張っていたと私は思います。一つには機
 構を維持しなければならぬという問題があつた。しか
 し、それだけでなくそれと関連して、農林統計をずっと
 拡充していこうという意欲で、久我さんはかなりエネル
 ギッシュクやられましたね。サンプル調査をどんどん入
 れていく。もう一方では、ストラクチャラルな、つまり
 リカレントの統計とストラクチャラルな統計と、その両
 面にわたって。

久我 日本のような場合には、小生産農民のことを問題
 にしないわけにはいかないじゃないか。だから、単なる
 生産面の総計をだすだけではダメだ、いかなる農民がど
 う生産したかということがわかるまで話をなうぬじや
 ないかという基本的な観念から、ストラクチャー中心の
 統計をどうして残せなきゃいかぬということ。いろい
 ろ努力したんだけど、必ずしも十分には成功しなか
 ったわけですね。

豊田 やっぱり、日本の小農民という見方が久我さんの

思想の根柢にありますね。

久我 小生産農民というのは、これは本当にそうなんですよ。

豊田 このごろ麦やモダン理論が出てきて、新しい農業の可能性だとか、何とかいつて-----。

久我 あれは、みんなうわついているね。

豊田 この間、久しぶりにあのころずっと一緒に仕事をした、今度の部長の関さんに会ったんですけれども、やはり関部長初め統計の伝統は、まだ残っているような気がします。

久我 そう思いますね。それがなくなると、農林統計というものはあまり意味なくなっちゃうんじゃないかというくらいに、ぼくは思っているんです。

よけいな話をしましたけれども、行政整理が出てくるのは、ある意味では必然性があるんだ。一言でいえばわれわれの教え方は、時代に対して早過ぎた。近藤先生なんかもそういつてあられるけれども、戦後の日本の民主主義か、今日のようなことになろうとは夢にも思わなかったね。ぼくなんか、そこに大きな誤算がありましたよ。

豊田 近藤先生も、どこかへそういうことを書いてあられるましたね。

久我 ある意味では、アメリカが解放してくれるということに対して、新しい民主的な世界が必ずやってくるという希望を持ったりした。そういう甘さがあったんです。統計をつくるときも、そういう意味で非常に熱中して、近藤先生のいろいろな書いてあられるようにやっていたけれども、統計だけ民主的な原則をつうぬこうとしても、そう

はいかないのだと、そこで、社会の今日の様な形での、
ある意味では発展かもしれないけれども、そういう展開
に対して考えるならば、統計の機関が、戦後あの時期に
新しい思想をもつて確立しようとしたことは、時間的に
は多少早過ぎたのかもしれないのです。だから、日本で一
般の社会の状態には、なじまないものがあることは否め
ないんじゃないかな。

豊田 正史はいろいろ紆余曲折がありますから、話を統計
に戻しますと、もう一つは30年代に高度成長時代に入
ると、今度はいわゆる基本法農政ということになって、
これはまた非常に奇妙な農業近代化論なんですけれども
それのためのデータということをお願いが、先ほど申
しました小農をやっていくんだというイデオロギーをも
って、ストラクチャラルな統計をどんどんふやしていつ
た。生産高統計に要する費用、労力を節約して……。

久我 要するに基本法に対する批判と、現実には統計をも
って承けていこうという意欲を持っていた。だから、そ
ういう意味では、統計は基本法の基本的な批判者なんだ

豊田 けれども、基本法農政に、ある意味で便乗して――
――まあ、役所ですか、同じ行政機関ですか、別のこ
とはいえないし……。

久我 ある意味では、便乗してあるわけですよ。

豊田 また、機構問題も絡めて、基本法農政と関連して
統計調査を進めていく、大体そういった筋道だったよう
に思いますね。

久我 統計機関の実態が、近藤先生の初期に果の機構を
評価して、地方の調査機関はだんだん他石になってきて
いるといわれて、新しい機構をつくったけれども、また

別の意味で、めが機関は化石になってきておると考えました。しかし、とにかく機関には現実に対応人がおるんだし、食糧事務所系統の機関とともに、たびたびの行政整理のたびに対応していかなければならなかった。人の問題が根底にありました。この人たちが生きていくためには、どうしても統計機関を維持していなければならぬ。しかし、統計だけ独立の機関だといっていても、その内容の独立性が本当に守れるかどうか、内部自体がくずれているということもあり得ることであつたけれども、ここでひとつ本当に統計機関を残さばう、社会の動きに合わせ、もう一通新しく再建するまで機関をつぶさないためには、どうしていったらいいかということを考えて、そこで統計の独立性を主張しながらも、地方農政局と結びつけることを考えた。

そうしてめがなければ、行政整理で統計機関だけうんと減らさるやう。また現実には減る場合に、この人たちがどこへ行って働くのかというときに、食糧の方はどうやらだんだん撤退することになるだろうから、そこへ行ってまた働く場所がなくなる。ところが、農政局が新しくできてくる。ここへ結びつけていった方がいいといふことで、ぼくはあえて統計の独立性を主張しながらもここは否定の法則で一応農政局に入れて命をうけ取りたいかぬ。こう考えて、農政局へ合併ということをやったんです。

ただ、これが本当にそれでよかったのかどうかということに、ぼくも、結論を出すには、まだちょっと早いと思うんだけれども、意識はそういうことでやったんです。だから、ぼく自身としては相当悲痛なものがあ

した。

豊田 ある意味では追い詰められたような。

久我 独立論を主張している人間がそういうことを考へざるを得ないということは、実に悲痛だったけれども。

豊田 でも、実質的にはかなり独立がちゃんと維持されてきたと思います。

久我 だから、中はずっとなんとか独立で維持してきたんです。

そのころずっと考えていたのは、そういうようなことでした。

統計をやめたのは、東北農政部長で赴任するというので、たしか40年3月でしたか。

豊田 35年12月から40年3月まで部長をやっておられた

久我 だから、いまや統計を去ってから15年ぐらいたっているんです。だんだん霧の中に隠れてくる。

もう一つ、ぼくとしては統計の仕事で思い出すのは、国際機関との関係だな。

豊田 それを次にお伺いしようかと思っていました。

しかし、それに入る前にいままでおまじしたことに関連して、ちょっとコメントさせていただけます。

農林統計の機構問題について、久我さんはずっと責任者として対処されたわけですから、そのさい基本的な立場として、日本の小農の置かれた運命に対する考え方があったと思うんです。そしてそのような考え方は、古くは農本主義から始まって、ずっと農林省の中にもあったんですけれども、また農林統計上層部に左翼的な思想の人がいたことも確かですが、やはり小農を保護するという思想がずっとあったような気がしますね。現在東京農大の教授をしている大橋さんが、「オレは小農護

持論者だとよくいわれた」というていましたけれども、
いわれいわれは大体そういう傾向でしたね。

あととし栗原君が訳したOECDの農業問題についての
研究報告書がありますがヨーロッパでも農業問題が関心
のまともになっているんですね。農業問題はぼくらずっと
一生懸命やったことなんです。日本が一番詳しくやっ
ているんじゃないかと思います。そういうところにも、農
民は消えないうんだ、農業にならなくて農民なんだという
考え方は、私たちにも非常に強く残っていましたね。い
まの関部長さんかにも、かなりそれが残っていると思
います。

久我 だって、現実にはそういう農民が残っている以上――
――。

豊田 農民はなくならないし、しかも、そういう農民が
確かに経済的には農業だけではやっていけないで、大部
分が農外収入に依存している。しかし、そういう農民に
よって、日本の農産物の相当の部分が生産されていると
いう事実を否定できない。それを前提にして、それをど
う守って、どういう道をとらせるかということはい、やは
り中心的な問題だと思えます。そういうところ方とい
うのは、やはり統計調査局時代からの統計調査のイデオ
ロギーとして残っているように思えます。

久我 厳然と残っているんでしょうね。

豊田 私は、久我さんが統計を去られた時よりずっと前
にFAOへ出ていたり、日本へ帰って間もなく大学へ
移ったりしたものですから、あまり大きな口はき
けませんけれども

豊田 いままで久我さんの統計調査部の思いを——非常に大ざっぱなお話しか、時間の関係でおまきでできませんけれども——、伺ったわけですが、その中に入ってこなかったことで、1つ、やはり国際的な分野での活動について、これから伺いしたいと思います。

久我さんについては、農林統計に関連しての国際人といえますか、やはりそういうイメージが相当あると思うんです。国際関係の仕事も相当された。それを思い出していただきたいと思います。

久我 どうして国際関係の仕事にタツチするようになったかという、やはり農業センサスとの関連ですね。確かに、クロワポレポーティングのことに関連して、アメリカに昭和26年に呼ばれて行きました。その時の経験について「アメリカ統計の旅」という文章を書いたりしたけれども、これはアメリカの統計を勉強に行ったということで、統計の国際活動でも何でもなかったわけだ、ただ、そのとき、アイオワの大学へ行って、当時有名な統計学者スネデイクがおりまして、その下にゲエッセンとか、いろいろおったんです。その1人として、あそこにも勉強に行っていたスカトメがいたわけですね。

豊田 スカトメがFADの統計部長になったのは、それより後ですか。

久我 FADの統計部長を最初やったのは、アメリカのセンサス・ビューローにいたトイバーさんで、その後も、スカトメがやったんです。彼はアメリカのアイオワ大学で勉強していて-----。

アイオワ大学を訪れたときのことと思い出しますと、日本の米の統計の話もいろいろしていて、気象台の大塚

土人が書いた「農業気候」という大まな本のことを思い
 出した。そのどこかに書いてありますけれども、日本
 の米の生産高と中国の鴨緑江のどこかの地帯の水湿との
 コリレーションはものすごく高いんだそうです。だから
 その水湿の変化を見ていると、大体そのときの米の生産
 高がこの程度になるんだと、推計することが出来る。実
 際そのとおりにほとんどなっていると書いてあるんです
 たまたまその話をして、けれども、これは両者の間に
 因果関係があると証明出来ないう。鴨緑江の水湿を調
 べて米の統計をつくるわけにいかないんで、実測調査だ
 の何だのが米の生産高調査が所要のたそういうことか
 う考えると、何かコリレーションが高い指標があればそ
 れを使っただういいというような議論をゲッセンがする
 かう、はつまり因果関係がないのにそういう統計の使い
 方はおかしいじゃないかといっただ。そうしたら、そ
 のときゲッセンが「そんなことはない。コリレーショ
 ンの高い指標がもしあるなら、それを使っただういいじや
 ないか」「もしかしたら、それでは外れることもあり得る
 じゃないか」「外れたら、そのときに改めればいいじゃないか」というんだ。これは、大抵アメリカ的な考え方で
 する。

豊田 非常にアラグマチックな……。

久我 その話を聞いて、非常に感心したのと同時に、ゲ
 ヲッセンのやっていたマスター・サンプリングの話をし
 いろ聞いたんだ。マスター・サンプリングについて、スカ
 トメからイントのマハラノビスさんがやった経済調査の
 話が出て、ゲッセンは両方とも失敗だという。オレの
 やったマスター・サンプリングもうまくいかなしいし、マハ

ラノビスエんのもうまくいかない。要するに、社会、経済事象の全体をマスター・サンプリングでエスティメートしようとしたって無理だ、ということです。あんまり細かい項目をたくさん調べて、それが全部代表性があるみたいなのことをいうのは、全くナンセンスだという議論です。スカトメは、それは確かにナンセンスかもしれないけれども、そういった全部の項目の1つ1つについて異なるサンプルをとって調べなきゃならないことになる。そういうことじゃ非常に大変だから、ある程度振れがあっても、あわせてマスター・サンプリングで調べるということは、ゲッセンさんがやっているようなことでいいんじゃないかというわけだ。それはいいんだけど、うまくいかないんだというのが、ゲッセンの答えでした。それが非常に印象に残りました。要するに、アメリカの統計の考え方が非常にプラグマチックであることを痛切に感じました。

そんなことはありましたが、本当に国際的に関係をおしたのには、何とんでも農業センサスで、FAOが世界農業センサスをやろうこれは万国農事協会のところからの伝統ですが——といい出し、日本も参加することに、戦後、最初/回は、日本はFAOの会議には行けませんでした。農業センサスの実施には参加しました。2回目のときには昭和30年ごろ——最初は25年でした。

豊田 昭和25年(1950年)です。30年ごろでしたね。はじめて久我さんがFAOの世界農業センサスについてのバンコクでの会議に行かれたのは、あれは1960年の世界農業センサス要綱を準備する段階の会議でしたね。

久我　そういうことで行きまして、農業センサスなるもののに対するFAOの考え方と、さっきの話いえないけれども、本農問題をかかえていてセンサスでは農業のストラクチャーを調べるんだという考え方で出席しているほととは、どうもそりが合いません。要するに、生産量を正確に押さえたんだとか、そういうことがしばしば出てくるわけでしょう。それはグロブアルホーディングじゃないや、メジャーじゃないか。センサスでやることは、そういうことじゃないだろう。農業のストラクチャーを明確にすることだろう。これがFAOにはなかなか納得できないわけですね。世界でも農業センサスというものが始まったのは、やっぱり生産量を正確に押さえたということですから。

豊田　ファームを通じて生産量をとらえていくという発想ですね。

久我　だから、そこギャップがあったわけですね。そういうことで、センサスの要綱をつくると非常に議論があった。向こうのいうのは、端的に言えば農場主義ですね。だから、農場が別のところにあれば単位を別けるわけで、テリトリアルに地域が違えば、同じ経営の下にあっても2つの農場にするでしょう。日本では、農家の出作、入作があろうとも、町村ごとに別の農場だなんてそんなことは考えられないから。農家というものをゆわゆわは中心にして調査せねえやうぬのだ。その主張に対して、農場主義の議論が多いのでこの議論を非常に強くやった。FAOはむしろ農場主義です。ヨーロッパにしろ、アメリカにしろ、それでいいわけです。

豊田　FAOのセンサス課長がシユミットでしたね。

久我 そういうことでやっついて、とうとうF A Oに
来いという話があった。ぼくは、それなう行ってもいい
と思ったんだけど、時の塩見次官が反対しました。
端的にいえば、そんなところへ行くことはい、日本の
統計をわつとしっかりした方がいいじゃないかというこ
とで、行かないで取りましたけれども、そういうことか
う、F A Oでいろいろ統計の会議があるときに呼び出さ
れたわけですね。

豊田 スカトメがF A Oに入って、久我さんがアメリカ
に行かれたのが26年ですね。バンコクの会議が30年ごろ。
スカトメが久我さんにF A Oに来てくれといい出したの
は、もつと早いような気がしますけれども、塩見次
官のころですね。それがずっと尾を引きますね。ぼくの
思い出につながらるところなんですけれども。

久我 スカトメが、何とかしてぼくを引っ張ろうとした
んだけど、日本も塩見さんの反対があったし、F A
Oの中でもだいたい反対もあったらしいですよ。スカトメ
がインドの人でしよう。アジア人ばかりになってきちゃ
いけないということで、反対があったらしいです。そん
なことを、うふと後でスカトメに聞いたことがあります。

いすれにせよF A Oと深い関係を持つようになったの
は、そのセンサスのことをやっついて、F A Oとして困
った問題が起こったわけですね。それは、統計上の南北問
題なんです。要するに国際小反協定をめぐって、アルセ
ンゲンだとか、オーストラリアだとかが中心になって、
非常に文句をいい出したのは、いまのクロップ・イヤーが
北半球主義だというわけですね。クロップのできる時期が

南半球は北半球と違うんだもの。そこでいろいろ価格や何かを、北半球の方で勝手に決めるかう、オレたうは、非常な不利益を受けている。そのもと統計にあるんだから、もつと公平な統計をとることをFAOでやらないのはおかしい。こういうことが、いわば南北問題の始まりです。そういうことがFAOで起こって、FAO自体非常に困ったらしい。

そこで、統計のことはFAOの総会で議論してもしようがないじゃないか。農業統計の専門家を集めて、それに諮問をして、意見を決めてもらうことにしろいいではないか、こういう意見が出たというのです。

豊田 それで、例のアドバイザリー・コミッティーが……
久我 アドバイザリー・コミッティーをつくることになって、その委員にぼくを選んでそれはFAOに常勤で来いというんじゃないかういいだろうということ。世界の各地域からおの人の委員が生まれ、ぼくも入ったわけです。それがFAOとの関係、国際的な関係ができた一番初めです。

そのときに、先ほどいった問題のほかにセンサスの問題や何かもかがかりましたけれども、その問題が一番中で、そのことをどうするかという議論がさかんに行われました。ところが、これはどんなに議論してみても、両者の意見は一致しない。スカトメは熱帯の人だからわかっちゃうわけだ。いつがクロッポイヤーだっていいじゃないか。夏之たまや夏之たっていいじゃないかという意見ですところが、北半球は絶対承知しないわけです。いまの暦年をとるという主張を崩さなかった、日本も、途中で夏をふうに夏えられちゃ困るんだ。そういうことで、

日本も、ソ連も、アメリカも、ヨーロッパ諸国も、みんな北半球にある国はいまのクロツプイヤーで行こうという意見だった。多数決ですね、それで結局、もともとありということになった。

こうしたことかう、その後総会にかわって、このアドバイザリー・コミッティーで、統計の問題は決めてもらうことにしようということになったわけですが、結局、あの問題をしおに事務局長は困難を逃けたわけです。

豊田 当時の事務局長は、インドのセンでしたね。

久我 それでアドバイザリー・コミッティーがいよいよ強固なものになって、センさんは、委員に対してFAOの事務局長と同じ旅費をくれたり、大変優遇をしてくれました。

会議はいろんなことがありましたけれども、一度はこういうことがありました。OECDの中で、ブタとは何をやといことが大もめにもめて決まらなかった。それで、FAOに集まってやったときに、ほくは座長をさせられて弱ってしまいました。ヨーロッパはECで統一価格を決めているでしょう。フランスの統計では、8カ月たてをきやブタにきやない。仔ブタなんです。ところが、西ドイツは、いわゆるグロイラー・ミタいに4カ月ブタをつくり出したんです。そうするとそんなのは水ブタだというわけだ。だけど統一価格だから、4カ月ブタを売り出してかう、フランスのブタが売れなくなつて、ドイツのブタがどんどん売れる。それでECの中のけんかになった。農業問題というのはそういうところがあるんだね。統一してやるといつても、そういうところでぶつかってくることがある。

豊田 ヨーロッパの中で、フランスとドイツ、イギリス
 それぞれ利害が対立しますかうね。いまでももめていま
 すね。
 入我 そこで、フタとは何をやという共通の定義をしな
 くちゃ困るということになって、そのときに、アメリカ
 が調整に入ったんだけど、どこもきかないわけだ。
 それでFAOでそのことについての会議をやるという
 ことになり、アドバイザリ・コミッティの会議が延長され
 まして、ぼくなんかも滞在を延ばされました。この問題は
 政策的な問題でしたね。この問題に対して日本はどう
 かということ、日本はFAOの決定どおり6カ月です。ア
 メリカも6カ月です。ところがアメリカがこうだとい
 うと、アメリカがそんなことをいったってという意見が
 あやすい。そこで日本も6カ月をんですよということ
 やつてくれとFAO側はいうわけです。それじゃとそ
 のとありやつたんですがフランスもドイツも両方とも承知
 しない。最後にフランスの方は一応6カ月にしようとい
 うことになったが、西ドイツはついた、エアハルト首相
 に聞かなくてもどうしていいか決められないということ
 したけれども、FAOとしては6カ月にすべきだという
 決議をすることにして、結局6カ月に決まりました。そ
 ういうことがあって、ヨーロッパのフタの定義を統一す
 ることを、ぼくがやったことになっていゝんです。本当
 はぼくがやったわけでもない。そういうことにならざる
 を得ないでやったわけです。
 そのほかでは農業センサスについては、ストラクチャ
 ーを問題にせにゃいかぬという議論で、ずっとたびたび
 やりましたね。

豊田 農家か農場かの議論は、シュミットとずっと続けてやりましたね。

久我 最後には、アメリカのトイバーさんが-----。

彼はセンサス擁護の人でしょう。

豊田 そうです。ぼくがアメリカへ行ったとき、彼はセンサス・ビューローの調査部長でした。

久我 メイバーさんが「なるほど、おまえのいうことはわかった」といい出した。ぼくは例としていったんだがたとえばタイはアメリカが指導し、ビルマは英国が指導した。戦後第1回目の農業センサスは両方とも失敗しているんじゃないか。それは失敗するわけだ。何と云えば、やはりタイやビルマは農民が中心で農業をやっているからだ。たとえばタイでいえば、タイに行ってぼくが聞いたところでは、農業センサスは奥の項目がないので使えないものになるというんです。ある地域では現金収入が一番大きいのは奥だということです。雨季になると水が来て、隣もうちもみんな沼になるやう。そのときにとる奥が、現金収入になるんだそうです。だから、農民の経済のことを調べるために農業センサスをやるといったって、こんを農民の経済の一部分しかわからない調査にうんと力をつけてやることになるのではFAOに協力して世界農業センサスに参加することほできないやという話でした。

その話をして、だから農民というもので考えにやならぬ。そういうことでファームハウスホールドということと強調した。だんだんやっているうちに、スカトメさんが「なるほど農業センサスの目的というのは、昔とだんだん変わって、農業のストラクチャーを調べることが非

常に重要になってきていることがわかった。将来の農業センサス要綱は、単なるいままでのような要綱では、国際的に通用しないことが明らかになった」といった。それでシュミットが怒って、「そんなことはない。農業センサスはセンサスだ」といった。それからFAOにサルコビツキというのがいたでしょう。

豊田 ユーゴ自身で、メソドロジーの課長でした。
久我 彼が、ぼくのその議論が大変に参考になると、非常に喜びました。FAOの将来の問題だといっているうちに、ぼくはとうとう統計を去って、仙台へ行っちゃったわけです。仙台へ行って1年間は、まだアドバイザリコミッティの委員をやっておりましたけれども、仙台からローマへ呼ばれたかうといつてちょっと行ってくるといふわけにいかないから、スカトメに話して、こういう仕事をいまやっているから、委員をやめさせてくれといったんです。そうしたら「まだ統計をやろ日まで休業にする」という通知が来たよ。こっちは統計をやろ日が来ないから、休業のままだ。やめることを承知してくれなかったんだよ。

おまえは非常に変わったことをいう人物だ、わけのわからぬことばかり主張すると思ったけれども、そうじゃなくて、国際的な農業の基本問題を、問題にしろといっているんだということがわかってきたと、大変高く評価してくれたわけです。統計局の水野君とか川勝君とかいろいろな人がその後FAOに行っていますね。実態は日本はそんなに高い水準にあるわけじゃないけれども、FAOでは、そういうふうの評価してくれておるそうです。そんなことでしばらくの間、国連の統計に関連した

国際的な仕事をしてきたわけですよ。

そのほかいろいろ思い出すことがある。豊田さんは後で行かれたけれども、最初はいらん三枝君が行っていた。ぼくはスカトメに頼まれて、「三枝君が神経衰弱になっっているからどうしてモイランに寄っていつてくれ。三枝君が大変苦しんでいるから、しつかりやれと激励してやってくれ」といわれて、イランへ行っただよ。そうしたう、ノッには、三枝君が日本人とさっぱり会っていない。それはFAOの職員だから無理はない実もある。そのところを大使館の人に話して、彼も日本人をんだかうもつとめんどうを見ろと、連絡をとるようなことをした。それで彼も非常に喜んでくれました。

そのときに、彼は、「こんなところで農業センサスがうまくやれるはずがない」というどうしてかと聞いてみると、「オオカミが出てきて、作物や家畜がなくなっちゃった」というところもあるんだから」という。

「そんなところのセンサスはそのつもりでやればいいじゃないか。村を囲出して、村倍したういいじゃないか」といつたう、「乱暴なことをいう」といつていた。「そんなものだよ」と、そのときは冗談半分でいつて、三枝君と別れたことがあります。

もうノッはFAOから帰りにエチオピアに行ってくれ。イタリアから飛行機で行けばわけはないといわれた。何この統計家が、牛の統計をどうしてもおしたいんだくれどとれないので、困っているということだった、そこでエチオピアへ行つて聞いてみると、ハイエナが出てきて恐ろしくて、調査をんかに行かれないうんだ。うよと遅くなつたうハイエナにやられちゃう。しょうが

ないかう、航空写真が何かないのかと聞いたら、それがあるんですね。アメリカが軍事的な目的で、航空写真を撮っていた。乾季になると氷がなくなっちゃうかう、みんなトライブ即ち流浪の民で、川の付近へ来ているんです。エチオピアには川は2本しかないんです。それを航空写真で写して、幾つかの目盛りで切った中のサンプルをとって、測定して、まず目倍すればいい。アメリカが航空写真を写しているんだかう、それを利用すればそんなに力不足はかかうないだろうという乱暴な設計をやったんです。

そうしたら、ミスター・コガの設計はこういうのだとFAOに報告されて、FAOは、航空写真による統計調査とかいって、ザルコビツケが紹介して、日本のミスター・コガの設計でこういうのができたといってくれた。そんなことで、航空写真統計調査をやる人間だなんて誤解されたことがある。そればかりでなく、そういうことで設計して、ほくとしては、ハイエナの走る都市アジスアベバに1晩しかいませんでした。FAOでは、大変いいサジェスションをしたと感謝されました。

もう1つは、生産力の問題で、ソ連とアメリカとで農業生産力はどっちが高いかと、大議論をしたんです。日本で、栗原氏が農家の社会勘定というのをやっていた。農家の社会勘定というのはおかしいじゃないかということはあるけれども、とにかくあれは労働の生産性を表す1つの方法にはなるでしょう。「農家」とつくるとおかしいけれども。

豊田 農業の社会勘定ですね、確かにある意味での生産性は計算できると思います。

久我 アメリカはそれでいいんですかう、社会勘定をや
ることによつて、生産力を比較することが出来るんです。
ほくは、そういう方法でやってみたらどうだというので
川勝君がやって---。

豊田 川勝氏がローマで勤務してましたね、60年代に。

久我 やったう、ソ連とアメリカの両者あまり差を
いというんだ。それで、アメリカの代表とソ連の代表と
が、両方の生産力が高い、低いという議論をやっている。
統計上で非常に問題になっている。統計についても両方
が議論していた。「待て、社会勘定でやってみると、両者
ほとんど差がないよ。」ということをおしした。

豊田 そううまくいきましたか。

久我 川勝君の計算では、そうだった。

豊田 生産価額と就業者数を結びつけば、生産性があ
ますね。

久我 それで差がないということで、FAOが大変に気
に入つたんです。けんかして困っていたときに、労働生
産性がどうだといつても、両方考え方が違うんだから、
どっちが高いといつても議論にならない。社会勘定とい
うので両方計算してみれば、大した差がないじゃないか
とやってみたわけだ。それで両方とも、そうか、アメリカと
ソ連の農業の生産力はそう差はないんだということで、
FAOの中のいろんな対立がおさまったんです。

それで事務局長のセンさんが大変に喜んで、スカトメ
なんかも一緒だったけれども、わざわざイタリアの最高
の料理店に呼んで、ごちそうしてくれたことがあるん
です。それはけがの功名なんです。

そういうふうで、FAOに行つておりに集しかつたで

す、常にいろんな問題のきっかけをつくる問題男だったんです。だから、本質的には、あまり大きな活動をしたわけではないうんだよ。

豊田 占領が終わって国際関係の問題が出てきたとき、やはり農業統計では、久我工さんが必然的にそれとかかわりを持たれたということでしょう。

それで思い出すのは、センサスのトレーニングセンターというのをやりましたね。あれは60年センサスの前でしたね。

久我 あれがきっかけになって、いまでも何かというと日本下やろんじやないですか。

豊田 あのときは、ほくも、久我工さんがバンコックへ会議に行かれる前に、前回はインドでやったと知っていますし、今度は日本が加わっているから、当然日本へ来る可能性は強いなと思ったものだから、こっちが忙しくなるのいやだという気持ちで、なるべく断ってくださーいといったわけですね。内心は、これはかぶろんじやないかなと思っていました。

久我 かぶって、やりましたけれども――。

豊田 ある意味では、おもしろかったですね。ほくは途中でアメリカへ行くことになって逃げろやっただけでも。

久我 あのとときに、ほくが困ったことの一つに、いろんな作物の名前の英語がよくわからないということがありました。埼玉県の志木でしたが、一緒に行っている連中が「これ、何だよ」と聞くんだ。英語がわからないうけいもない、物を見てもほくにはよくわからないんだ。大根ぐらいわからなければ、一つ一つ何だときかれてもわからないう。だから、「オレ、ちやつと英語わからないう」とい

っていたんです。そうしたら、よせばいいのに韓国の代表が、「英語なら何でも私が訳してあげます」という、こちらは「日本語でも何というのか、本当はわからないうんだ」というわけだ。(笑)

それから、おかしかったのは、ニワトリの羽数を勘定したときの農家の答えです。ぼくはニワトリの小屋の大きさで、羽数をエスティメートしたんです。たしか農家は600羽とか答えていたけれども、ぼくのエスティメートでは、どうしても900羽ぐらいいると思われろ。だから農家に「君、これ、900羽ぐらいいるじゃないか」ときいたら、そのオヤジが何ぞいうかと思った「あんた、税務署の役人と同じこというね。実際は、1200羽いるんだよ」というんだ。600羽の倍いるわけなんだ。そして「外人だからいっていいんだけれども、村の約束でふだんのとおりで行こうということだから600羽とオレはいったけれども、実際は1200羽いるんだ、900羽というのは、税務署の役人と同じ見当でいったね」といって、笑われたことがある。

そんなことがあって、あのトレーニングセンターも、いろんな滑稽なことがあったけれども、とにかく東南アジアの各国の人には大変喜ばれたんだ。

豊田 それから後にアジア経済研究所の理事になうれたときに、直接関係はないでしょうが、国連のアジア統計研修所の建物と結局、久我さんがまためんどうを見うれたわけですね。

久我 あれには、また別の面が弱ったよ。というのは、アジ研は東畑先生が会長としておうれた。東畑先生もご存じないのに、当時あった淡沢君という理事が、アジ研

を拡大するというので、「夢の12階」というプランをまとめたんだ。賤畧かうカネを集めてつくるというわけだ。ところが、カネが1銭も集まらないうので、できなかった。豊田でもアジ研の別館ができてアジア統計研修所はそこへ入ったんでしよう。

久我 はじめ設計事務所に頼んで、カネを払って設計だけでしたんです。だけど、建物そのものは夢なんですよ。カネが集まらないうから建物作できない。それでぼくが、あとを引き受けた。これほっぽっておくと、大変なことになるっちゃうんです。詐欺になりかねない。そうこうしているうちに、実はその夢の建物の中に、国連の統計研修所を入れてあげるかういうっしやいといっていたらしく、外務省もそうですかということ国連に話したかう、統計研修所がアジ研に来ることになった。そのときのアジ研の所長は小倉さんでした。「こういう話を聞いたけれども、久我君、聞いているか」といわれるが、ぼくは「聞いてませんね」というわけだ。だんだん調べてみると、いまいったような話で、統計基準局はもう入れてもらうものだと思っている。ぼくはだれも知らないんだから、冗談じゃないと思った。そうしたら、前の濃沢さんがそういうことをやっていたとわかった。

それじゃ、どうしても研修所をつくらにやならぬ。研修所は方々の国かう誘いがあつたのに、日本に持ってくることに決めただから、研修所を入れる建物がないと国際問題になりますと外務省はいう。何とかしてもらうにや困るということになった。小倉さんは、「そんなこといったって知らないんだから、突っはねてしまえ」といわれたけれども、そうはいかないですよ。賤畧かうカネ

を集めようといってもなかなか集まらないかう、まずアジ研の拡充をしたいという計画を立て、それから、アジ研の建物に入っていた海外技術協力事業団の理事にも話して、海技協を入れるんだかうということ、大蔵省に話をつけて、5億という予算をアジ研につけてもらった。だけど、5億じゃ、アジ研や海技協が入る建物だけしかできないかう、根っこはできるけれども、さらに統計研修所を入れるところをつくらにやならぬ。それで敗北かうその分のカネを取ろうとしたけれども、統計なんかのためにはカネはあせないよという話だ。

それでいろいろ苦労しまして、まず自転車振興会に話をつけ、国際会議場をつくりそこで同時通訳をする施設の最新をやつを入れるということで、機械振興になるかう、機械振興事業団にも補助してくださいと頼みこんだ。通産省の団体ですか、通産省も応援してくれて、よろしいということになった。ところが、実は同時通訳の施設を入れる場所がない。だから、それを入れる建物の代をちょっと上乗せしてくださいといったら兄談じゃない、そんなものは補助対象になうないという。会長さんは山田さんという人でしたが、そこを工夫してもらうのがあなたの腕じゃないかと頼み込んだ。建物をつくるんだから、機械よりよっぽど枠の方が高いんです。それで9階の建物を、ぼくはとうとうでっとうり上げてしまった。

そのとまに大蔵省は、民間のカネでやるといったんだからダメだといって、カネをよさないし、統計研修所を入れるなんてことはオレは知らぬという。けれども、つくったう入ってもよろしいということぐらいは、いったういいじゃないかと交渉したわけです。そうしたう、お

まえがつくれるものをうつくってみろ、つくったう入ったっていいよと、相沢主計局長がいつてくれたんで、それをいいことにして、いまのように自転車振興会などに話をつけたわけです。

経団連からモカネをもういしました。経団連からは集めようといったってなかなか集まうない。

そこでお金をお貸し下されにしてくださいと行って頼んだんです。そしたら貸すだけならわかるけれども、かき下されとは何だというんだ。貸しを回収しないでもいいじゃないですかという意味ですと行って、結局幾らか経団連から応援してもらった。そういうことで別館を建てたんです。それで統計基準局の顔も立つということになったんです。

豊田 ぼくも帰国して農林省に戻って、統計研修所にうよつと関係したんですが、国連は研修所のチーフやスタッフをすべて任命しており、スタッフは東京へ着任してしまっていたんですね。

久我 ですかう、困りましたよ。

豊田 それで、スタッフはいるところがないという状態で、統計局がノミを提供して、ぼくも一時そこで通訳をやったりしていたんです。基準局の方は研修所運営の予算はとったんだけど、研修所を開設することができず予算も使えないという状態で、困っていたんです。

久我 あれには驚きましたよ。

豊田 どうしてああいうことになっちゃったのか……。

久我 だけど、そのおかげで、アジア研は建物の余裕ができたわけですね。

その後、海外技術協力事業団もアジア研の建物から出ま

したし。いまではアジ研も喜んでいきます。

豊田 アジ研もいまは別館をゆうゆうと使っていますね。アジ研の会議で時々いったことがあります。そう感じました。

久我 考えてみればずいぶん乱暴なことをやったもんです。他人がやったのは架空だったんだから、そのままにしておくわけにいかなくったんです。

豊田 主んがアメリカに行っていたときもそうだったな。スカトメがぼくにFADへ来てくれというのに、このうの事情で行けぬ返事したものだから、FAD側が態度を硬化させてしまった。そこで次官がぼくに「豊田君にアメリカから帰りにFADへ回って事情を説明させてくれ」というわけだ。そういうけれども、豊田君はもう出発して、ハワイまで来ているわけでしょう。その豊田君に、日本へ帰ってこないで、ローマへ行くよう伝えてくれというんだから。

豊田 ハワイで、国際電話がかかってくる足どめ食いしました。

久我 豊田君に伝えるのはいいけれども、ヨーロッパを回ってくるにはカネがかかるでしょう。どうやって、ヨーロッパ回りの手配したう切符をいいか。

豊田 ハワイのワイキキの浜の日系人経営のホテルに足どめされたまま、いつ動けるかわからない。

久我 ぼくは、それでたいへん苦勞したんですよ。結局どうしたかというと、何とかして円払いで航空切符を手に入れる方法を考えた。

豊田 まだ当時は為替管理がきびしくて、突然外貨の割当てを受けるなんて不可能でしたからうね。

久我 日航の社長に会って、「月払うからヨーロッパ回りの切符を本せと交渉したう」「そんなむろやなことができるか」とことわられた。そとで、「だけど、あなたのところは1年の終わりに外国の航空会社との間で決済するでしょう。そのときに、30万や40万の狂いがあるのは当たり前じゃないか。そこのところで調整すれば、できないことはないじゃないですか」といったんだ、そうしたう日航の社長が確に決済のさいに多少の調整はやっている。けれども、そこへ割りこもうといいおされても困るね。しょうがない、今度だけはやってあげるよ」ということで、ようやく日航の社長のオーケーで月払いで切符をおしてもうえることになった。桜井君とぼくとたいへん苦労しましたね。

切符はおきこりになったが、今度ばかり工面しなきゃならぬでしょう。旅費で30万なんて、国外旅費にしてもそんなにすぐ工面できるものではない。それで横見さんのところへ行行って「何にもいわないで30万貸して下さい」とお願いしたんだ。「何か悪いことをするんだらう」といわれるから「そうなんですけれども、これをやらないと、次官の顔も何もつぶれちゃうんです。」といったう。じつとぼくの顔を見ていて、「よし」といって貸してくれた。桜井さんとすぐ日航へ行行って月払いで切符を出してもらって、やれやれ……。

豊田君が日本へ帰って来てしまっていたら、幾らという工夫しようたってできなかったね。日本にいる場合は新しく外貨割り当てをとらにやらないかう。だからどうしてもハワイにいてもうかにやいかぬ。あれは大変迷惑をかけたな。

豊田 ぼくは何もわかってないで、え、我さんがやってくた
さるのをハワイでじつと待っていただけで……。

又我 あのと同時にもう一つ怒られたのは、電話料のこと
だった。豊田君のところへだけじゃなくて、サンランシ
スコにいるぼくのおじのところへも、電話をかけた。東
京での工面がダメだったう、豊田君のヨーロッパ回りの
旅費をぼくに貸してくれとっておいんだ。その電話
料を払わにやならぬ。桜井さんは、役所の電話料として
払うのが当然だというんだが、電話料は官房で一括して
払うんでしよう。だから、官房が怒って「国際電話に1
回に7万も8万もかかるのに、官房に無断で2回も3回
もかけておいて後で支払ってくれとは何ごとだ」という
わけです。しょうがないかう、「そう怒るな。これは仕オ
がないかう事々にしよう。半分はオレが払うよ、そのか
ゆり半分は文書課で払ってくれ」ということでけりをつ
けた。なかなかな文書課は承知しなかったがね。

あの件は、全く危機一髪でしたぬ。

豊田 たしかう月の末でしたが喜多さんと一緒にハワイ
へ2、3日滞在して翌日の夕方の飛行機で帰国するとい
うときでした。

突然電話がかかってきて、私にハワイで待てということ
になった。農林省の方で何が起っているのか、さっぱり
わかっていませんに、それかう3～4日、ハワイでぼや
として過しました。ある意味でいい保養をさせてもらい
ましたが、どうなるのかという不安もありました。

それがうまくいって、農林省から、ローマのFAO本
部を訪問せよという出張命令が届き、日航かうヨーロッ
パ回りの切符が来ましたので、またアメリカへ逐度りし

たんですが、夏夏のようなハワイかう、ニューヨークへ着いたとき雪が降っていたのが印象に残っています。それからヨーロッパへ渡りローマへ行ったわけですがホテルへ着くと早速大使館に電話しましたというのは、出張命令では旅費はローマの大使館あてに送っておくということ、途中でたまたまニューヨークに来ていた友人にちよつと借金しました、けれども、ローマへ着いたときは懐中乏しかつたからです。

当時農業アタッシエとしてローマの大使館に勤務していた板広さんが電話に出、「君の来るのを待っていたんだ。すぐ大使館へ来なさい。ホテルの前で電車に乗って終点でおりれば大使館はぐだかう」というので「はい」と答えてホテルを飛び出して、電車に乗ったんですがけれども気がついたう、どつちの方向に行く電車に乗るか聞いてなかった。(笑) たぶんこれでいいんだろうとは思ったが不安なので、車掌にたずねたところ英語が全然通じない。それでしようがないかう、電車を飛びおりに、タフシーを拾って、「エンバシー・オブ・ジャパン」と叫んでどうやら大使館に着きました。

私は事態を何にも知らずにローマへ行ったんですが、板広さんは、F.A.O.に対して、豊田が日本政府の意向を持って来ることになっているかう、それを待ってはつきりした回答するといつて、又我さんの件について回答を避けていたんですね。スカトメがかなり強硬に、ミスター・コガをF.A.O.によこさなければ、当分日本からはF.A.O.は人を採用しない。F.A.O.ではそういう意向になっているんだと言ひ張つて、大変深刻な事態になっていることを、そのときはじめて知ったわけなんです。ローマへ着い

た翌日だったか、板広さんと一緒にスカトメのところへ
会いに行きました。ところで私は何も、日本側へ訓令を
持っているわけではないので板広さんはしかたなく、日
本の農林省としては、久我さんをF A Oに出すことは、
困難な事情にあるとあいまいな説明をする。
それでスカトメも久我さんを是非出してくれという主張
をくり返す。結局、私が日本へ帰ってF A O側の強い意
向を再度農林省に伝えるということで会見を終わりました。
スカトメは、本当に久我さんにF A Oで働いてもらいた
いと思っていたようですね。ハワイから逆戻りしてロー
マのF A O本部を訪問した一件はゆたしにとつても忘れ
られない思い出です。

そのほかにも久我さんをめぐって、いろいろ思い出さ
れることがありますけれども、だいぶ時間もたちました
ので、一応これで終わりにいたしたいと思います。
どうもありがとうございました。